# 《銀》を継ぐ者

星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
《銀》を継ぐ者

【Ｎコード】
Ｎ１０９９Ｙ

【作者名】
星

【あらすじ】
ゼムリア大陸に存在するカルバート共和国には、古くから一人の凶手が存在した。
狙った獲物は必ず仕留め、不老不死とさえ噂される、伝説の凶手（暗殺者）。
《銀》と呼ばれるその暗殺者は裏社会のとある組織と契約を結び、貿易都市またの名を魔都クロスベルへと向かう。
これは、そんな暗殺者の、出会いの物語。

この物語は英雄伝説　零の軌跡　と　碧の軌跡をリーシャ・マオの視点で大方書いています。
ネタバレはもちろん、作者の勝手な憶測や捏造もバンバン入りますのでご了承ください。キャラも崩壊する可能性大です。また、原作をリーシャ視点、といってもほとんどがオリジナルになる可能性があります。
やっちゃったよ感、丸出しです。
さらに作者は初心者なので、文が全体的にわかりにくいかも知れません。
徐々に直していきたいと思っているのでご指摘は遠慮なくお願いします！

# 《銀》

太陽が地上を煌々と照らしているときも。
満天の星空と月が闇夜を淡く彩っているときも。
私は淡々と父から教えられることすべてを頭と身体に叩き込んでいた。
物心ついたときから続いていた作業だったからなんら違和感はなかった。
それが普通から掛け離れていることは、日曜学校と呼ばれる教育機関に通っていたため十分に理解している。
けれど――辛いと思ったことも、嫌だと思ったこともないし、母を知らない自分を不幸だと思ったこともない。
ただ、淡々と生きてきた。
遠い昔から続く先祖代々の流れ
《銀》という伝説の凶手を継ぐために生まれてきたことは確かだったから

でも、父に命じられ、父を殺して《銀》になろうとしたとき。
私がそれをどうしても実行できなかったとき。
今までの生き方――《銀》であることに初めて疑問を覚えた。
怖かった。
熱された鋼をハンマーで叩き、丹念に丹念に刀を作る刀鍛冶のような父の愛情を否定してしまうようで。
《銀》という刀を作るために、けして少なくない時間を私という刀に注ぎ、やっと完成した『私』が出来損ないのナマクラ刀であって、

それで父を失望させてしまうのが。
怖かった。初めて、怖いという感情を抱いた。抱いてしまった。
人に紛れ込むための演技であったならまだ良い。けれど今、私は心から恐怖を感じている。
《銀》は、例え銃弾の嵐が来ようと恐れなかった。どんなに強大な敵と対峙しようが、絶対に恐れなかった。つまり、この恐怖は私が出来損ないであるという、なによりの証ではないかと思うのだ。
不治の病により布団に伏す父の横で心だけを恐怖に震わせていると、父は私を一瞥して苦笑した。
それからしっかりとした静かな声で私に言った。

「それもまた、お前だ」

意味がわからなかった。

「お前の銀は、お前が決めるがいい」

続けて紡がれた言葉も意味がわからなかった。そのときには既に恐怖も薄れていたが代わりに疑問だけが大きくなった。
父の言葉の意味をなんとか理解しようと、開いた時間にいつも考えていたがどうしても理解できない。

一月後、父はこの世を去った。

『お前の銀はお前が決めるがいい』

最大の難問を残して。

＃＃＃

赤を基調とした華美な木造の建物が建つ東方人街は今日もたくさんの人々の声で賑わっている。
一見、賑やかな商店街だが一歩人気のない路地に入ると印象はガラリと変わる。
丁度街のとある路地裏では、裏側で銀と呼ばれている黒衣と仮面を身につけた小柄な男と、鋭い目を隠すように細長い眼鏡をかけた明るい紫髪の青年が話していた。

『カルバートの西端、魔都クロスベルの覇権奪取、か。フン、貴様も大変だなツァオ』
「まったくです。が、クロスベルの覇権奪取を見事成功させれば、私としてもいろいろと有利に動ける。そのために、あなたには協力してもらいますよ《銀》殿」
『安心しろ。契約分は働いてやる』

路地裏から見える明るい通りからは親子連れの楽しそうな声やら客引きの元気の良い声が聞こえてくる。だというのに、路地裏は驚くほど静かで、冷たい。
この路地から出たら、きっと暑いだろうなぁ。
表通りから感じる人の熱気に、なんとなく銀は思った。こんな真昼間から表通りに出るわけではないが、夕方にここで食料を補充する予定がある。
不老不死だ伝説の凶手だなんだと言われているが、人よりも少し……とは言い難いが強いだけで、なにも食さなくても大丈夫というわけではない。
『さて……そろそろ私は行く』
「ええ、次に会うときはクロスベルで。期待していますよ」

狭い路地裏にツァオの声が響くと同時、銀はゆっくりと闇に紛れるようにして消える。それから静かに建物の屋上まで登り、屋根伝いに東方人街を駆けていく。

（魔都クロスベルか――前金として結構なミラをもらえたし、下見に少し早く行こうかな）

眼下に見える人の川。
それが途切れ、少し山の方へと入っていくと険しい竹林がある。道なき道を数分ほど跳んだり走ったりすると、一件の小さな小屋が見えてくる。
そこが、銀の数ある隠れ家のひとつだ。

「……準備をしなければな」

面倒だ、とばかりに呟き東方風の小屋の引き戸を開けて中に入ると、銀は黒衣と仮面を脱いだ。
紫紺の髪が背中の中間辺りまで垂れ下がる。髪の一部が顔にかかるのを感じ、棚から黒のリボンを取り出して脳天の方の髪をひとつに束ね、視界を遮らないようにする。
それから手甲を外し、東方風の戦闘服――――外国ではチャイナ服と呼ばれている――を脱ぎ、オレンジを基調とした動き安い服を身につけ、短パンを履く。
黒衣を脱ぎ、女性の服を着てから《銀》と呼ばれていた男だった少女は外へと出て、練習用の武器が置いてある倉へと向かう。

リーシャ・マオ。

それが少女本来の名前である。
《銀》は百年以上も前から存在しているため、不老不死などという

噂が流れているが、それはもちろん間違いだ
《銀》は一子相伝で代々その中身の人間は違う。
リーシャもまた流れに逆らわず、二年ほど前に《銀》の名を継ぎ、初代の銀を演じている。
ただ、本当にこれで良いのかわからなかった。
百年ほど前、カルバート共和国では大きな動乱があった。
だからこそ《銀》という存在は必要だった。彼の行動次第で、歴史は如何様にも変わっただろう。
今だって裏側では大きな物から小さな物まで争いが起きている。
《銀》という存在は共和国の裏社会において重宝されている。
それはリーシャとてわかってはいるのだが疑問は消えてくれない。
（なんのために、《銀》は続いてるんだろう）

百年ほど前は、カルバートの未来のため。もしくは東方人のため。
では今は？
リーシャの父は《銀》になにかを見出だしていたようだった。
けれどリーシャにはわからない。
《銀》になにも見出だせていない。
そのことを感じる度に、やはり自分は出来損ないなのでは、と思ってしまう。

『お前の銀はお前が決めろ』

父が最後に残した言葉の意味。
恐らく、これが、これだけがリーシャが《銀》に対する疑問を解消できる唯一の鍵だ。
この意味が理解できたとき、リーシャは《銀》に誇りというものをきっと抱ける。
そう信じている。

ぐっ、と腕を上げ身体の筋肉を適度に刺激する。真上にはギラギラと太陽が光っており、少しだけ眩しい。

（太陽、か。なんだか、羨ましいなあ）

陽の当たる場所に生きることなど、絶対にないだろう。自覚しているからこそ、今はこの太陽が羨ましくてたまらない。
輝くことこそが、私の誇りだと言わんばかりの太陽。

私もいつか、なにかを誇りたい。
真っ暗な闇の中で、誇りに思えるものが。
欲を言ってしまえば暖かい陽の当たる場所が良いけれど、きっと届かないだろう。

暗い方向に行きかける思考をリーシャは頬を叩いて戻す。

「よし、鍛練鍛練！」パシパシと数回頬を叩いて己を鼓舞する。

一週間後、クロスベルにて運命的な出会いを果たすとも知らずにリーシャは練習用の武器をいつものように振るった。

さきほどの空元気は打ち消し、淡々と。

## 貿易都市クロスベル

帝国と共和国の二つの宗主国を持つクロスベル自治州、その玄関口でもある駅前通りでリーシャは地図を見ていた。

（ええと……この通りを北に行くと中央広場で、南に行くとウルスラ間道……中央広場から東通りを経由して行くと、黒月の支社になる予定の建物がある港湾区、さすがに広いなぁ）

さすがはゼムリア大陸有数の貿易都市というところか。
街だけでも隈なく見るには時間がかかりそうだ。
できることなら街の外も多少は見ておきたいところだが、今日は既に昼間。宿を取り、街を見回りつつ緊急時の逃げ道のルートを確認して終わりになってしまうだろう。

（まずは歓楽街で宿を取らなきゃ）

クロスベルの大まかな情報は取得済みだ。その情報の中には宿屋の情報ももちろんある。東通りにも一件宿屋があるらしいが、今日は敵対勢力であるルバーチェ商会の情報を少しでも多く得るため、その近くにある歓楽街の宿に泊まる。
地図の暗記を終え、予定も大まかに決めた。
もうここには用がないとリーシャがその場を離れようとしたとき、ふと一枚の広告が目に入った。

『アルカンシェル
本日公開練習会』

###

今思えば、あの広告に興味を持ち、ふらふらとアルカンシェル劇場内に入ってしまったのが間違いだった。

「すごい……」

舞台の上を自由自在に舞う、金髪の女性にリーシャは目を奪われていた。
演出なのか、金髪の女性がジャンプしたりくるくると回ったりする度に光が舞い散っている。
光は所詮は演出だ。
けれど、なぜだろうか。
金髪の女性――かの有名なアーティスト、イリア・プラティエが舞い、演じることでその光はただの作り物ではなくなっていた。
例えるなら、彼女の演じる太陽の姫に付き従う精霊だろうか。

（本当にすごい！　こんなに、こんなにこの地上で輝ける人がいたんだ）

どんどんどんどん、彼女の演技が生み出す世界にリーシャの意識が引きずり込まれていく。
自分は《銀》なのに、誰かの世界に引きずり込まれるなんてこと、あってはいけないのに。
けれど、どうしようもない。
もうリーシャはイリアが生み出す世界の住人になってしまった。
曲とともに物語はクライマックスへと向かっていく。
イリアの身体は疲れなど感じさせず、軽やかに舞台を支配し、太陽

の姫にふさわしい輝きを見せる。
イリアの一挙手一投足に目が離せない。離したくない。地上に現れた金色の太陽を一秒でも長く見ていたい。
それからどれほど経っただろうか。

『本日はアルカンシェルの公開練習会にお越しいただき誠にありがとうございました――』

盛大な拍手とともに舞台に幕が降りたのを、リーシャはどこか遠くにいるかのような心地で呆然と聞いていた。
なにもしていないはずなのに無駄に大きくなってしまった胸は大きな感動と憧れ、そして少しの後ろめたさでいっぱいだ。
リーシャは今まで知らなかった。
あんな風に、ただ上を向いて力強く輝ける人がいたなんて。
闇の中にいただけに汚泥のように腐った性根を持った人間は山ほど見てきた。
《銀》に殺される瞬間、今まで行ってきた悪事を忘れて愚かにも命乞いをした人間も少なくはない。
そして《銀》であるリーシャ自身もその手を汚してきた。
標的が年老いた老人であろうが女子供であろうが、なんの感慨もなく殺した。

（……早く出よう）

すでに会場には人はリーシャを残して居らず、聞こえる音と言えば舞台裏でアーティストたちが談笑している声のみ。
なんだか、酷く惨めだった。
血塗られたお前にはあの光は絶対に届かないものだ、そう言われているようで。
荷物の入った黒いバッグを背負い、リーシャは逃げるようにその場

を去った。

（宿を取って、今日はもう休もう。なんだか、疲れちゃった……）

会場を出ると変わらず空には太陽が光を放っている。いつもならば身体の筋肉を伸ばすところだが、今はとてもそんな気分にはなれない。

「見つけたわよ！！」

「ちょっ、イリアくん！？」

ホテル『ミレニアム』へ向かってトボトボ歩いていると後ろからドアが開く気配がした。

慌ただしい気配に疑問が浮かんだが、今はとにかく休みたい。それに今ここで厄介事に巻き込まれるのは今後のことを考えても得策ではない。

しかし、なぜか厄介事の種でありそうな気配がリーシャに向かってくる。

（……な、なんでイリア・プラティエが？）

なにかの間違いに違いない――と思いたいのだが長年培ってきた気配察知能力はリーシャに嘘をつかない。

間違いなく、アルカンシェルの超有名アーティスト、イリア・プラティエはリーシャに向かって走ってきていた。

（ど、どどどどうしよう、ここで逃げるのも変だし、でも、え、あう、そもそもなんでイリア・プラティエは私なんかに構うの？）

「捕まえた！」

「きゃ！」

とごちゃごちゃ考えていると後ろから勢いよく抱きしめられた。
人に身体を触れられたことなどあまりないため、必要以上に全身が強張る。
それからはされるがままだった。
肩を叩かれ、身体をくるくると回され、最後に顔をジィ、と見つめられる。

「えと、あの、イリア・プラティエさん？」
「ふんふん……完璧ね」
「へ」

困惑気味に尋ねると、イリアは満足そうに一人頷いた。
そして、再びリーシャの肩を力強く掴み

「あんた、名前は？」
「え……？　リーシャ・マオです」

名前を尋ねたあと、とんでもないことを言い放った。

「あんた、アルカンシェルに入りなさい」

「え」

## イリアの部屋にて

「それにしても……けしからんボディしてるわねぇ。えい」
「ひゃあ！　や、やめてくださいよイリアさん！」

西通りの街道側に建っている高級アパルトメント『ヴィラ・メゾン』。
その最上階の部屋でリーシャはなんとも遺憾なことに、あのイリア・プラティエに胸を揉まれていた。
別にイリアがこの部屋にいることは問題ない。なぜならこの部屋の主はイリアその人だから。

（うううう……おとーさぁん）

なぜここに来ることになったのか。
その原因について、リーシャはこの部屋に来る前のことを頭に思い浮かべた。

###

「あんた、アルカンシェルに入りなさい」「え」
ホテルに向かう途中で急に抱きしめられただけでも驚きなのに、いきなり勧誘までされてリーシャの口からは戸惑いの声が上がった。
（な、なんで私が？　とにかく、断らないと――）

突然のことに一瞬動揺したが、そこは伝説の暗殺者。すぐに持ち直し、適当な理由を付けて断るべく頭を働かせる。
しかし、すぐに考えることを破棄することになった。
まるでこちらの心情を見透かしたように

「ちなみに、あなたに拒否権はないわよ―♪」

イリアが一言で否定の意見を封殺したからだ。
理不尽なこと極まりない。
だがリーシャの方も簡単に「はい」と了承してしまうことはできない。

「わ、私には無理ですよ。舞台なんて」
「大丈夫よ。あなたには才能がある！　足りない部分はあたしが鍛えてあげるから安心しなさい！」
「は、はやく帰らないと母が心配するので――」
「通信、貸したげるわよ」
「いえ、その、母は病気を患っているので看病しないといけませんから！」
「嘘ね」
「はう、そ、その……勘弁してくださーい！」

すべての言い訳を打ち落とされた。
さすがに居もしない母親を引き合いに出すのがまずかったのだろうか。
勝負は見えた、とばかりにイリアが半泣き気味のリーシャを引っ張り、どこかへと連れていく。
途中、アルカンシェルのアーティストとスーツを着込んだ男がこちらを見て苦笑しているのがリーシャの目に映る。どうやら、今のようにイリアが突飛な行動に出るのは珍しいことではないらしい。

微力ながらも抵抗していたリーシャは、ゆっくりと力を抜いた。
この人に捕まったのが運のつきだ。
アーティストの人の目が、そう言っていた。

＃＃＃

自分に《銀》のような強気が少しでもあったら、こんなことにはならなかっただろうか。
いや、なんかもうこの人に興味を持たれた時点で銀だろうがなんだろうが終わりな気がする。
そんなことよりも、今はバッグの中にある数々の武器が気になる。
符はまだ良い。護符ということにすれば十分ごまかせる。
しかし鎖やクナイはさすがに無理だ。護身用と言い張るには鎖の存在が邪魔をするし、かと言って正直に言うわけにもいかない。
とりあえず、幻術の応用で徹底的に隠すことは決定だ。

「うっし、リーシャ」
「な、なんですか？」

イリアが膝を叩く音にリーシャは顔を上げた。

「まずは稽古のしきたりから始めるわよ？　朝５時にあたしを起こすこと！　あたしの服を洗濯すること！　それから――」
「ちょっと待ってください！　成り行きでついて来ちゃいましたけど、入団するだなんて言ってません！」

アルカンシェルに入団する方向で話しを進めるイリアに制止の声をかける。

遠回しにアルカンシェルに入る気がないことを伝えるが、イリアは不思議そうに首を傾げた。

「あら、そうだったかしら？」

「そうですよ～。とにかく、失礼します」

イリアのペースにこれ以上巻き込まれるわけにはいかない、とソファから立ち上がり一礼してから早々に立ち去ろうと背を向ける。だが、その足が外へと向かわなかった。

「ふ、ふ、ふ。逃がさないわよ～。やっと見つけたライバルの卵なんだから。はい、座った座った」

イリアが出ていこうとするリーシャの肩を掴み、無理矢理ソファに座らせたならである。

やっぱり、この人に目を付けられた時点でリーシャの運命はほぼ決まってしまったようだ。

「うう……。わかりましたよう。明日から、朝5時に起こします……」

「よろしい。あ……ベッドないし一緒に寝る？」

「寝ません。て、ひょっとして私をここに泊める気だったんですか！？」

「もちろん。だって、そうじゃないとリーシャがあたしを起こせないでしょ」

「そ、それは確かにそうですけど……」

さすがのイリアも寝るときは鍵を掛けるだろう。

鍵程度の障害ならばピッキングするなり窓から入るなりできるが、リーシャがそれを行うのはあまりに不自然だ。

しかし赤の他人と一緒の寝床、というのは武器を所持していることを入れないで吟味しても、到底気は休まらない。
それ以前に、気になって眠れない。

「……そうだ。なら、ソファで寝ましょ。テーブルを片付けて、ソファをくっつけて。そうと決まったら、早速準備しなくちゃね！
リーシャも手伝いなさい」

これはもう、腹をくくるしかないようだ。
リーシャはため息をついて、元気のない声で頷いた。
明日こそは入団を断り、絶対に東通りの宿で寝ると心に誓いながら。

## アルカンシェル

太陽が昇り、小鳥が囀る爽やかな朝。
高級アパルトメント『ヴィラ・メゾン』の一室で、リーシャはボーッと虚ろな目で窓を見ていた。

（結局、眠れなかった……）

他人の気配が気になって、というのももちろん理由の一つだ。
しかし、不眠の一番の理由は別にある。
酷すぎるのだ。
イリアの寝相が。

（ないよ。これはないよ）

ソファが狭すぎたのだろう。
夜中に何度もソファから落ち、大の字になって口を大きく開いて寝るイリアを何度見たことか。
そして、何度ソファに戻したことか。数えるのも馬鹿馬鹿しくなり、そしてソファにいちいち戻すのも面倒になってイリアをベッドに押し込んだのは正解だったとリーシャは思う。
ベッドに押し込んだことでイリアは落ちることなく自由な格好で眠れているし、リーシャもようやく身体を休めることができた。
最初からベッドに寝かせれば良かった、と思わなくもないが、まあそれはそれだ。

「さて、と……イリアさんを起こさなきゃ」

時計の針がようやく5時を指したのを確認したリーシャはソファか

ら立ち上がり、天井へと腕を伸ばした。
それから、ふと思う。
誰かを起こすことなんて、生まれて初めてだ。

ベッドへと向かうと、やはりと言うべきか。毛布をかけず、足の半分をベッドから投げ出している、あられもない姿のイリア・プラティエが寝ていた。

（あはは……なんていうか、舞台とのギャップがあまりにも……）

昨日彼女から『稽古のしきたり』を聞かされた時点で豪快で面倒臭がりな性格であることは予測できていたが……あの舞台を見て、憧れた相手の実像がこうもアレだと、泣きたくなってくる。
ため息をひとつ吐いてからリーシャは呼びかけた。

「イリアさん、朝ですよ」
「……」
「イリアさん、朝ですよ！」
「……すかー」

どうやら、熟睡してるらしい。
今度は肩を掴み、揺らしてみる。

「イーリーアーさん！　朝ですよ！　起きてくださーい！」
「……と、」
「起きましたか？」

ようやく反応したイリアの顔を、リーシャが覗き込む。
イリアの口が小さく動いた。

「あのと……い……れてるの……。べ……めざまし……ら……ちょうだい」

非常に小さく、こもった声だったのでなんと言ったかは聞こえなかった。

しかし、リーシャは幼い頃から教えられてきた技術のひとつ、読唇術により彼女がなにを言ったのか、わかってしまった。

『あの時計、1時間ぐらいずれてるの。ベッドの上の目覚まし時計が鳴ったら起こしてちょうだい』

（目覚まし時計があるなら自力で起きてくださいよ～）

###

それから1時間後、目覚まし時計が鳴りイリアは自力で起きた。どうやら、1時間前にリーシャが肩を揺らしたときに意識は微妙に覚醒していたらしい。

まどろみの中にいたのを目覚ましが叩き起こした、というわけだ。

で、今はリーシャが用意した朝食を食べている。

「ん～♪　けしからんボディに加え、料理までできるなんて、本当に色んな意味でおいしいわね～」

「あ、あはは……それでイリアさん。1日泊めて頂いておいて申し訳ないんですけど、入団の方はお断りさせてください」

炒飯を満面の笑みで頬張っているイリアに話しを切り出す。

断る機会があるとすれば、リーシャが考えた限りではこの朝食時しかない。
もしこの機を逃してしまえば、リーシャはイリアのペースに完全にはまり、なし崩しで入団するはめになってしまうだろう。
イリアは炒飯を食べるのをやめて、指を顎に当てる。

「……昨日から気になってたんだけど、なんでそこまで入団を嫌がるの？」

真剣な表情で問われて、リーシャは自分の違和感に気づいた。
その違和感は、今までの自分の行動だ。

「いや、違うわね。あんたはアルカンシェルに――舞台に惹かれてる。でも、リーシャの中のなにかが、舞台に上がることを渋らせてる。違う？」

そう、そこなのだ。
いくらイリアの勧誘が厄介だとはいえ、リーシャが本気を出せばどうとでもあしらえる。
それをしなかった。
その時点でリーシャが舞台に惹かれていることは間違いない。なのに、頷けないのは――

「多分、届かないと確信しているからだと思います」
「そんなこと……」
「あるんです。昨日、イリアさんの舞台を見てすごいと思いました。こんなにも輝いている人がいるんだって、本当に初めて知りました。でも、だからこそ、私には無理なんです」
生まれたときから暗闇に身を置いていた自分が――人を殺し、血塗

られた手を持つ自分が――そのことを心から『悪い』と思うことができない自分が、あんなに素敵な世界で輝けるわけがない。
イリアはリーシャの答えを聞いて、むずかしそうな顔でなにかを考え始める。
沈黙が続くこと、数分。イリアは「よし」と一人頷いて炒飯をすごい勢いで胃に押し込み始めた。
リーシャがそれを呆然と見つめていると、やがて炒飯の入っていた器はからっぽになる。

「リーシャ、早く食べなさい！　稽古に行くわよ！」
「ちょ、私の話し聞いてましたか！？　お断りしますってさっき――」

「証明してあげる！」

抗議の声を上げたリーシャを、イリアの力強い言葉が遮る。

「あんたが輝けることを、あんたに証明してあげる。あたしの目に狂いはないわ。だから、ついてきなさい！　リーシャ！」

## アルカンシェル（後書き）

うう、なんか原作とどんどん違う方向に言ってるような気が……。
リーシャさんの描写に不安を覚える今日この頃です。
なにより、イリアさんの豪快加減がわかりません。

と、それはともかくとして。
四話目で初の後書きですね。ここまで読んでくださった読者の皆様、
本当にありがとうございます。

## アルカンシェル2

「おっはよー！」
「し、失礼します」

アルカンシェルの扉を開け、元気良く挨拶をするイリアに手を引かれ、リーシャはおずおずと中へ入った。
この人は強引だ。
そう思いながらも、先刻イリアの部屋で聞いた言葉が耳を離れてくれず、結局リーシャはついてきてしまった。
中に入ると玄関ホールには受付の男性しかおらず、気配を探ってみても正面観客席に二人だけ。
どうやら、通常の稽古の時間より少しだけ早いようだ。

「おはようございます。おや……イリアさん、そちらの方は？」
「アーティストの卵よ。まだ了解してもらってないけど、今日絶対にアルカンシェルに入れるわ！」
「ええっ！？」

やっぱり、あの言葉を無視して逃げたほうが良かったかもしれない。

（うう……）

助けを求めて受付の男性に視線を向けるが、そこにあったのは昨日、イリアに強引に引っ張られるのを見ていたアーティストたちと同じ苦笑い。
どうやら、この劇場にリーシャの味方はいないらしい。
ステップを踏みながら正面の観客席へと入っていくイリアに手を引

かれるままリーシャは奥へと入っていく。

『あんたが輝けることをあんたに証明してあげる』

そう言ったイリア自身に、その言葉を証明してもらうために。

「やっほ〜、団長、ちょっと舞台借りるわよ」

「ダメだ、と言っても聞かないんだろう？　ところで、その子はどうしたんだね」

軽い挨拶をするイリアに呆れながら団長と呼ばれた男性は後ろのリーシャのことを尋ねる。

待ってました、とばかりにイリアは鼻を鳴らすと自信満々にリーシャを紹介した。

「将来このあたしを越えるかもしれない子よ。今日はこの子の顔合わせってところね〜。名前はリーシャ」

「あの、私まだ入るなんて一言も……」

会う人会う人、リーシャを入団者だと紹介するイリア。

もしかして言い触らすことで既成事実を固めて事実にしようとしているのでは、と勘繰りイリアの顔を盗み見る。

だが、そんな思惑などないのだろうなぁと思わせる無邪気な笑みがあるのみで――。

多分、心の底からリーシャがアルカンシェルに入ることを確信しているのだろう。

「よっ、と。リーシャも上がってきなさい」

「はい……」

きっとこの人にはなにを言っても無駄だろう。
諦め半分で返事をし、舞台へと跳び上がったイリアに習ってリーシャも舞台へと上がる。
観客席から見ていた舞台は、今では舞台装置もなく殺風景だ。しかし、だからこそどこか荘厳で清らかだ。
こんな場所に、私なんかがいて良いのだろうか。
何者にも汚されていない神域を真っ黒に汚してしまったかのような、どうしようもない罪悪感を覚える。
だが、どこか浮かないその感情は払われた。
太陽のような輝きを持つ、イリア・プラティエによって。

「あたしの後に続きなさい」

そう言ってイリアは急に踊り出した。舞台の上をくるくる足先で回り、そこから空中高くへ。

「リーシャ！」

着地したイリアはリーシャの名前を鋭く呼ぶ。それから、舞台の中央にある円をなぞるようにイリアは走る。リーシャも呼ばれるがままに入った。
イリアの動きは速く、優雅だ。
足運び一つ。
体捌き一つ。
頭の上から足の爪先まで神経を張っていて、武術の動きとはまた違った美しさがある。
円の周りを追いかけっこして三週。イリアが空中へと飛んだ。くるくると回りながら降りてくるイリアの姿を見て、リーシャもすぐに飛び、動きを真似る。
けれど、全然違う。

イリアはもっと、優雅に回っている――いや舞っている。
対して、リーシャは本当にただ回っているだけだ。
イリアが着地した。リーシャも着地した。
足音はあくまで軽い。片や舞台では右に出る者はいない『炎の舞姫』。片や東方人街で魔人と恐れられている《銀》。重く、どこか鈍い楽器を思わせるような場違いな音を出す者ではない。

「合わせなさい」

静かにイリアが言った。
リーシャはただコクリと頷き、体中の神経を集中する。
感覚はイリアの動きを察知するために総動員。胸が熱い。悪くない熱さだ。
イリアがとん、と短く跳ねる。同時にリーシャも跳ねた。
とん、とん、とーん、とんとん。
短く、短く、長く、そしてステップ。
リーシャはイリアの後に続くのではなく、むしろ対極から交差するように動いた。
イリアは小さく笑みを零すと、孤を描くかのように高くジャンプする。リーシャも同じく動いた。
くるり、舞台の中央にある円を半周して着地し、イリアと視線が合う。
ほとんど直感で、リーシャはイリアの方へと走り、イリアも向かってきた。互いに交差する一歩手前。
二人は前に向かってジャンプし、空中で数回前転する。
ジャンプして、ステップを踏んで、空中で回転して、円の周りだけでなく壁際を走って――

一時間。
ようやく二人は止まった。

「ふぅ……すごいじゃない！　あとは感情を込めることと、余裕を持つこと。動きは完璧だわ。正直、予想外だったわよリーシャ♪」
「あ、ありがとうございます」

少しだけ息を乱れさせ、興奮気味に褒め、評価するイリアにリーシャは満面の笑みを浮かべた。
とても、とても楽しかった。
こんなに胸がドキドキして、清々しい気分になったのは初めてでどうしたら良いかわからない。
勝手に頬が緩んでしまうのを自力で止められない。
暗殺者にあるまじきことだけれど、今は全然そのことが気にならない。
どうしよう、ワクワクしてドキドキして、意味もなく高揚してる。
こんな自分がいたなんて、知らなかった！

「で、アルカンシェルに入る？　ちなみに、今のあんた、すごく輝いてたわよ」

イリアが柔らかい笑みで手を差し延べてくる。
本当なら首を振って断るべきところだ。
でもイリアは輝いていたと言ってくれた。
事実、リーシャも今までの人生の中で一番楽しかったと思えた。輝く物を手にしていた。

（――うん。決めた）

アルカンシェルとは、このクロスベルだけでなく共和国や帝国、リベール、レミフェリアなどなど大陸全土とは言わないが、有名な劇団だ。
そんな有名な劇団に、暗殺者――しかも共和国で有名な《銀》がいる。
そんなこと、誰が予想する？
誰も予想しない。
まさか、とは思われるかもしれないが決定的な、それこそ顔さえ見られなければ問題はない。
見られたときは非常に厄介なことになるだろうが、そんなヘマは余程のことがなければしない。
《銀》の良い隠れ蓑になる。
そう暗殺者としての自分を納得させ
「よろしくお願いします。イリアさん」
リーシャは、イリアの手を取った。

## アルカンシェル2（後書き）

舞台での動きシーン、非常に難しいですね……。
次からはイリアさんとの日常。アルカンシェルの人たちとのふれあいを書いていきたいと思います。
原作突入は……いつになるんだろう？
アルカンシェルの人たちは多少話し方や行動に違和感が出るかもしれません。
できるだけ研究したいと思いますが、これ違うんじゃない？　っていうのがあったら遠慮なくどうぞ。

では、ここまで読んでくださり誠にありがとうございました。

## 日常　～朝～

リーシャ・マオの一日はお昼に食べるお弁当を作ることから始まる。今日のお弁当の中身はサモーナの塩焼きと、だしの効いた卵焼き。王様ポテトとプチキャロットを醤油やみりんで煮たもの。それから梅という木から取れる実を塩で味付けし干したものを入れたおにぎりだ。

「ん～♪　リーシャのけしからんボディを見ながら、こんなにおいしいご飯を食べられるなんて……本当に良い拾い物したわ」

「あ、あんまりジロジロと見ないでくださいよ……」

にまにまとどこかの親父のようににやけるイリアを嗜め、洗い物を済ませたリーシャも朝食を食べ始める。

ああ、本当になぜこの胸はこんなにも大きく成長してしまったのだろう。

《銀》のときは体形（主に胸）を変えるために内功を使っているせいで全力で戦えない。

町を歩けば男性の視線を少なからず感じる。

そしてイリアにことある事に揉まれる。

百害あって一利無しとはまさにこのことだ。

「そうそう、昨日も話したけどまずは基本的な動作からね」

「はい」

「アルカンシェルでわからないことがあったら劇団長か、支配人に聞きなさい。それと、元気良く挨拶すること。テンションは高く、特に公演前は」

「はい！　あ、小骨取りましょうか？」

劇場内でのルールを話しながら箸を四苦八苦させるイリアを見て、リーシャが申し出る。

イリアは「お願い」とにこやかに言うとリーシャの方へサモーナの切り身を寄せた。

ボロボロになった切り身に、今度からはちゃんと骨を取ろうと密かに誓う。

ちなみに、早く稽古したいだろうからイリアのお弁当に入っているサモーナの小骨はすべて除去しておいた。

（それにしても――）

サモーナの小骨を取りながらリーシャは考える。

クロスベル市内外の下見の時間をどう取るべきか、と。

（西通り、住宅街、歓楽街ならひと通り見ることができたけれど。でもそれだけじゃ有事のときに迅速に動けないし）

今回《銀》が黒月と契約した内容は、貿易都市クロスベルの裏社会の覇権奪取に協力すること。つまり、主な仕事は現在クロスベルに巣くっているマフィア『ルバーチェ商会』を相手に戦うことだ。

となると、当然土地勘が必要になってくる。もう一歩のところで逃げられては元も子もない。

なので早い内にひと通りの下見はしたいのだが、アルカンシェルの新人アーティストという表の顔を持ってしまった今。下見の時間は夜遅く、イリアが眠ってからでなければ取れない。

（となると――取れる時間は最低1時間ぐらいかな。できることなら3時間くらい欲しいけど……）

現時点ではどれほどの疲労が稽古で溜まるのかは完璧に予想できない。
昨日、アルカンシェルへの入団を果たした後イリアの稽古を見学していた限りでは、やはり取れる時間は1時間になってしまう。
しかし、入団したばかりの新人が看板女優のイリアと同じ量の稽古をするとは到底思えない。
しばらくの間は見積もりよりも多くの時間が取れるはずだ。

「はい、取れましたよイリアさん」
「ん、ありがと」

小骨を除去したサモーナをイリアの方へ寄せると、イリアは嬉々としてサモーナをつつき始めた。
さきほどの予定に問題があるとすれば、予想の斜め上を行く言動を取るイリアだろう。

（うーん、一緒に寝ましょうって言いそうだなぁ……）

そのときは、もちろん丁重にお断りするが。

###

リーシャがイリアの部屋で密かにため息をついている頃、ニコルは港湾区の公園を走っていた。
それは以前からのニコルの日課であって行動自体になんら異常があ

るわけではない。
ただ、いつもはアーティストとしての腕を上げようという向上心があったのに対し、今日はただ焦りばかりがあった。

（リーシャ、だったっけ）

その焦りとは、新しく入団した新人に対するもの。
昨日、ニコルはいつも通りにアルカンシェルへと向かい、いつも通りに稽古を始めるつもりだった。しかし、アルカンシェルに入り中央観客席へと向かえばそこには憧れのイリアさんと、見たことのない少女が踊っていた。
圧巻だった。驚きだった。
微妙なズレが気になったけれど、それでもニコルは二人の踊りに魂を掴まれた。
イリアさんは言わずもがな、完璧だった。恐らく、太陽をイメージして演じていたのだろう。演出の光はなかったけれど、とても輝いていた。
対して、少女はただイリアの動きを真似て踊っていただけだった。
しかしその動きには一切の無駄がなかった。
もしあの少女が、リーシャがなんらかの役をもらい、完璧に演じきったとしたら。
あのイリア・プラティエに匹敵し得るのでは。
そこまで行かなくとも、凄まじいスピードでアーティストとして成長していくのは間違いない。
それこそ、リーシャよりも先に入ったニコルを置き去りにして。

（まだ……まだ負けたくない。やっと掴んだ、夢の一歩なんだ）

それを、後から入ってきた新人に、簡単に追い抜かれてたまるか。
パシ、と頬を叩き、闘争心を胸にニコルは走り込みに専念する。

クロスベルの一日は、まだ始まったばかりだ。

# 日常　～朝～（後書き）

## 日常　～昼～（前書き）

多大な捏造があります。

## 日常　～昼～

甘かった。
新人だから練習時間は短いはず、と思った自分が甘かった。

「スピードはそのままで良いわ。もっと優雅に、余裕を持ちなさい」
「は、はい！」

まだ支配人と劇団長以外、誰も来ていない時間、リーシャはイリアの指導の下、舞台上にて稽古をしていた。
アルカンシェルはアクロバティックな演技を売りにしている劇団だ。優れた身体能力はもちろん、その才能にかまけず訓練してこその演技。
基礎はきちんとやればやるほど良い。基礎があってこその応用だ。

（でも、まさかいきなり稽古だなんて……）

普通、こういう劇団は掃除などの雑用から入るのでは。そもそも自分なんかが朝一番に舞台の上を陣取ってしまって良いのだろうか。
舞台の上をイリアに指示された通りに舞いながらリーシャは少しだけ不安になる。

（うううう……お父さん、私はもうどうしたら良いのかわかりません）

人と接する術は日曜学校で得たが、舞台のことはからっきしだ。
《銀》として受け継いだ経験は膨大だが、当然そこには舞台の経験などない。近代的なものなど、戦術オーブメントの扱い方ぐらいだ。

（……あ）

ここで、リーシャは大変なことを思い出す。

（戦術オーブメント、新しく変わったんだよね）

裏から仕入れた新型のオーブメント、通称『エニグマ』は従来の物と同じく七曜石のカケラ（セピス）を使って作られる結晶回路（クオーツ）をセットすることによって七曜石から導力を引き出し、様々な現象を起こせる。そのうえ、使う者の身体能力を強化する機能も変わらない。話しによると超小型の導力通信回路が搭載されているらしく、場所を選ばずに瞬時に情報のやりとりができるらしい。

ただし、導力波中継ターミナルが設置された地域のみらしいが。

とにかく、新しいオーブメントを導入したということは、新しくクオーツを作らなければいけないということだ。

すなわち、新しいクオーツを手に入れないことにはオーブメントを駆動することによって使用できる魔法（アーツ）を使えない。

（だ、大丈夫かな？　ツァオさんと合流する日までに揃えられるかな？）

非常にマズイ。

稽古中にこんなことを考えるのはイリアに失礼なことだ。それはわかっている。

けれど、彼女にとって《銀》の仕事は絶対に失敗できないものである。別に、誇りがあるわけではない。ただ、これ以上父を貶たくないのだ。

《銀》の仕事で失敗するということは、父の顔に泥を塗るのと同義。

「はい、そこでくるっと回ってストップ！」

イリアからの鋭い指示が思考の中に意識を埋めていたリーシャを舞

台に戻す。
リーシャは教えられた通りにその場で回り、ポーズを取って止まった。

「んー……もうちょい腕を高く上げて。うんうん、そうそう！はいやめー」
「あ、ありがとうございました！」

ぺこり、と頭を下げてそそくさとリーシャは舞台から下りた。それを見ていたイリアは、ふと満足気に一人頷き始める。
「イリアさん？」
どうしたんだろう、と首を傾げる。

「いやー、なかなか圧巻だったわ。やっぱり、持つべきは大きな胸の才能ある後輩よね～」
「ちょ、どこ見てるんですかイリアさん！」
「いいじゃない、いいじゃない。そんなに立派な胸を持った子なんてそうそういないわよ？　てことで、ちょっとだけ揉ませてくれない？」
「揉ませませんっ！」

「役……ですか？」
「ええ、あんたがどれくらい演技できるのか見とかなきゃ、今後の稽古の方針が立てられないからね。お弁当食べたら、まずはそうね……」

卵焼きをモグモグと咀嚼しながらイリアは考える。
楽屋を沈黙が支配している間、リーシャはどんな難題を申しつけら

れるのか緊張していた。
卵焼きを飲み込みイリアが口を開くまでの時間が、とても長く感じた。

「月、なんてどうかしら」
「月、ですか？」

思わぬ題材にリーシャは目を丸くした。
イリアは頷くと、口の中に最後の卵焼きを放り込む。

「闇夜に輝く月を、踊りで表現しなさい。爪の先まで神経を張らせて、あんたの全力で」

###

「イリアくん」
「あら、なにかしら劇団長」

リーシャが昼食を食べ終えるまでの時間を、イリアは中央観客席で潰していた。今、舞台にいるのは女性に高い人気のある男優ユージーンとテオドールだ。
その二人の演技を見て、ときどきアドバイスをしていると劇団長が話しかけてきた。

「なにかしら、ではないだろう。今朝話した新作の件、やはり私は反対だ」

「ああ、新作の。なんで？」
心底不思議そうに首を傾げるイリアに劇団長はため息をつく。
それから呆れたとばかりの口調で言った。
「あのねぇ、いくらなんでも入ったばかりの子を準主役になんてできるわけないだろう」
ああ、と理由を聞いてイリアは納得した。
劇団長はなにも体裁を気にして、新人のリーシャを準主役にすることを反対しているわけではない。
舞台の世界は実力がすべてだ。舞台の上では経歴も年も関係ない。
演技がすべて。
ではなぜ劇団長は反対しているのか。
それは技術面もそうだが、精神的な面が反対の理由として大きい。
入ったばかりでろくに舞台を重ねていない者がいきなり準主役、というのはかかるプレッシャーが大きい。
ましては、初めての舞台。
リーシャにかかるプレッシャーは想像を絶するものだろう。
まれにイリアのようにプレッシャーとは無縁な人物もいるが、パッと見た限りではリーシャはもろにプレッシャーを受ける性格だ。
「大丈夫よ」
しかし、イリアはまるで心配していなかった。
舞台に関しては人を見る目に絶対の自信を持っている。
だからこその断言。
しかし、劇団長の顔からは不安の色が消えない。
「しかし……」

「それに、あの役は――『月の姫』役はあの子が一番合うの」
渋る劇団長にイリアはさらに断言する。
そう、公開練習のあの日。イリアがリーシャを捕まえて、絶対に逃がさないようにしたのはなにも才能があるから、というだけではない。
対極の存在だったからだ。イリアは自分の舞台になにが足らないのかを理解していた。
それは自分と同等か、それ以上の才能を持つ、真逆の存在。
「劇団長もわかってるはずよ。今までのアルカンシェルに、なにが足らなかったのか」
「……まあ、私も舞台に生きる人間だからね。しかし、だからこそ潰すわけにはいかないだろう」
「大丈夫よ。だってあの子、控えめな性格してるけれど、舞台に関しては真っ直ぐだから」

＃＃＃

「す、すいません。お待たせしました」
弁当を食べ終え、慌ただしくも中央観客席へ駆け込みリーシャは劇団長とイリアに頭を下げる。
「いいわよ。あたしたちは体が基本なんだから。ご飯はゆっくりよ

く噛んで食べていーの」
「イリアくんの言う通りだ。さて、ユージーンくんとテオドールくんも、そろそろ休憩したまえ。もう、2時間も続けているだろう？」
丁度良い、とばかりに劇団長は舞台にいる二人に催促する。
「もうそんなに時間が経っていたか」
「だな～。集中してたからわからなかったぜ。じゃ、失礼します。イリアさん、劇団長。それと、練習頑張れよリーシャ」
「あ、ありがとうございます。ユージーンさん」
丁寧に礼をするリーシャに、ユージーンは笑顔で手を振り、舞台裏へと引っ込んでいく。
テオドールもイリアたちに一礼すると、ユージーンに付いていった。
「さて、それじゃあ始めましょっか」
「お願いします！」
気合い十分、といったリーシャの声にイリアは満足そうに首を縦に振った。
「演技するときは常に役のことを考えて、自分なりの演技をしなさい。けれど、自分の主観だけじゃダメ。客観的な視線も取り入れて、そのうえで不自然じゃない演技を心掛けなさい」
「はい！」
「じゃ、ところどころでアドバイスするから、始めて」
レッツゴー、と陽気なイリアの声を合図にリーシャは舞台へと上がる。そして目を閉じて集中する。

（私が演じるのは月。闇の中で輝く月……。主観だけじゃなくて、客観的な視点も入れて――《銀》のイメージが良いかも）

自分なりのイメージを入れて、それを《銀》のときのように客観的視する。

しかし、《銀》ではあまりにも暗い。彼の存在は夜空の月と比べて、あまりにも血で汚れすぎている。

ならもう少し少し遡ろう。

《銀》がまだ、純粋だった頃。暗殺なんて考えなかった、遥か昔の、初代の記憶。

彼は正義感が強かった。

例え自分の手が汚れようと、彼は高潔さを失わなかった。

彼は、本当に家族思いだった。優しかった。けれど甘くはなかった。

ああ、ダメだ。

ここから先は、あの激動の時代に入ってしまう。

彼の手が著しく血塗られてしまった、あの時代。

今の《銀》ができたキッカケ。

リーシャはそこまでで一旦《銀》の記憶を切った。

（あの頃の《銀》を、それだけを、踊りで演じる）

閉じていた瞳を開き、リーシャは地を蹴った。高く跳躍し、舞いを始める。

《銀》は東方のスラムで暮らしていた。

なにもかもが荒廃したその街では、盗みは日常茶飯事。路地裏を歩けば腕や足を失っている人間などざらにいたし、酷いときには死体まであった。

その環境で腐ることなく、少年時代を過ごした。

それというのも、真っ直ぐに打ち込めるものがあったからだ。
それは今も、子孫に記憶とともに受け継がれている武術だ。
彼にはとても強い師匠がいた。
それこそ、あの『剣聖』を軽くあしらえるような『理』に至り、むしろその『理』を自分の思うがままに操作できた武術の師匠が。
師に習う武術こそがすべて。このようなゴミ溜めの街で、彼は誇りを持っていた。
盗みはしなかった。する必要がなかった。
食料はすべて街の外の森から採れたからである。魔獣がわんさかいたが、彼にとっては良い修行相手だった。
傍から見れば、薄汚い毎日だ。
しかし、彼にとってはキラキラと輝く、充実した毎日だった。
それが壊れたのは、彼が２０歳になった頃――

リーシャはただ、彼を表現した。凶手と呼ばれる前の――闇の中でも輝いていた彼を。
同時に思う。
自分も、彼のように真っ直ぐな誇りを持ちたいと。暗闇の中ではなく、光の下で、あのイリア・プラティエのように輝きたいと。

（届かないだろうけれど、思うだけなら良いよね――？）

＃＃＃

アバン劇団長は、驚きの目でその瞬間を見ていた。

演技があまりにも良かったからではない。リーシャの纏う雰囲気が、急激に変わったからだ。

（まさか、ここまでイリアくんと真逆だとは……）

最初、イリアが彼女を連れてきたときアバンは首を捻った。
どこからどう見ても旅行者で、困った顔を浮かべている彼女はとても入団希望者には見えなかった。
というより、わざわざイリアが連れてくるほどの『なにか』を持った少女には思えなかったというのが大きい。
しかしいざ、舞台に上がって素人ながらも必死でイリアに合わせているのを見て、その理由は判明した。
彼女には、イリアに匹敵する才能がある。
今までアルカンシェルに足りなかったのは、イリアくんと並ぶほどの才能を持つ者だ。
もちろん、イリアだけでも舞台の完成度は高い。
だが、どうしても物足りなさがあった。
イリアだけの世界が広がる。それは衝突を感じさせない世界で、衝突のない世界からは最高の感動など生まれようはずがない。
イリア一人では、限界がある。
それでもアルカンシェルが高い人気を誇れたのは、イリアが常に最高の物を求めたからだ。
ないならないなりに、やりくりすれば良い。
イリアはいつも突拍子のないことを提案するが、それはいつも少し無理をすればできる範囲だった。
しかし、これからは違う。
イリアほどの才能を持ち、なおかつイリアとは真逆のベクトルを持つ演技。
目の前でリーシャはまさしく闇夜に輝く月を表現している。

（だが――なんだか冷たい、いや鋭すぎるような）

喉を唸らせ、アバンは違和感の正体を掴もうと舞台を見る。
今のリーシャは、冷たい光を放つ月だ。
暗闇の中で一人輝き、高潔で、どこか優しい。
しかし途中から、鋭い刃物のような冷たさが入ってきた。
それは優しい光を保つための刃であり、必要とあらば他者を切り裂く冷徹な刃でもある。

「リーシャ、もう少し柔らかくしなさい。抑揚をつけて、鋭い光を弱めなさい」
「あ、はい！」

飛んできたイリアの指示に、リーシャは素直に従った。動きに少しずつ抑揚が生まれ、心なしかリーシャの雰囲気も幾分柔らかいものになっている。

「はいストップ。なんだか男らしさみたいなのを感じるから、そこを女らしさに代えなさい。力任せはダメ。受け入れて、輝くのが月よ。動きの基礎はまあまあできてたわ」
「ありがとうございます。でも、お、女の強さですか？」
「ええ、あんたも年頃の女なんだから、なんとなくはわかるでしょ？」

さも当然のように言うイリア。
わかるものなのか？　とアバンは思ったがそこは女性であるイリアの方が理解はあるのだろう。
しかし、帰ってきたのは控えめな声ではなく、気まずそうな沈黙だった。

「まさか、あんた……そんなけしからんボディしてて自分のこと気にかけてなかった、なんて言わないわよね」
「……あはは、その、いろいろと忙しくって」
信じられない、とばかりに目を見開くイリアにリーシャは曖昧な笑みで返す。
けしからんボディは関係ないと思うのだが、とアバンは内心ため息をつき、状況の推移を見守る。

「リーシャ、あんた、カレリアのところに行ってきなさい。そんで、女のいろはを学んでらっしゃい」
「お、女のいろは……ですか？」
「ええ、なんならいろいろとすっ飛ばして、胸揉みしだかれる？」
「すいません、カレリアさんに聞いてきます！」
それにしても、イリアの強引さというかマイペースさはもう少しまともにならないだろうか。

## 日常　～昼～（後書き）

舞台がわからないー！
そして意味不明になってしまった感があります。
特に初代《銀》。
かなりやっちまった感があります。
修正の目処が立ち次第、手直ししたいです……。
ご指摘お待ちしていますので気軽にどうぞ。
むしろご指摘して下さったほうがなんだか安心です。

では、ここまで読んでくださり、ありがとうございました！

## 日常　～夜～

「はぁ……はぁ……」
「ま、今日はこんなところね。うん、この調子でばんばん鍛えていくわよー！」

あの『月』の演技のあと、リーシャはカレリアから女のいろはについて講義を受け、基礎の動きを反復していた。
途中からイリアも入り、稽古は想像以上に激しいものとなったため、リーシャは本当に久しぶりに息を切らして座り込んでいた。

「あはは、お手柔らかにお願いします」

体が熱く、汗が次から次へと流れる。
しかしそこには不快な感覚などなく、むしろ清々しい。

「さて、さっさと帰ってお風呂にでも入りましょ。あ、一緒に入る？」

明るい笑顔でとんでもないことを提案するイリアに苦笑しながら、息を整えたリーシャは静かに立ち上がった。

「いえ、遠慮します」
「あら残念。リーシャの胸、揉みたかったんだけれど……」
「残念そうな声で言っても、ダメなものはダメです！」

むー……と両手をわきわき動かすイリア。リーシャの顔を見て、それから胸を見る。何をしようとしているのか、なんとなくリーシャ

はわかってしまう。

「なんであたしから距離を取るのかしら？　リーシャ」

「……身の危険を感じたからです」

すすす、と数歩横に離れていくリーシャにイリアは少しだけ考えると、身を低くした。

その不可解な動きに「イリアさん？」と問い掛ける。瞬間、イリアが跳躍した。

リーシャに向かって。

当然、この程度は意表を突かれようとも避けることはできる。問題なのは、柔らかいじゅうたんが引かれていようと固いものは固いアルカンシェルの床だ。

もし、ここで避けたらイリアに怪我をさせてしまうかもしれない。

以前ならば絶対にしない躊躇。

それがリーシャの動きを遅くした。

「つっ、かまえたー！」

「きゃあ！」

背中からぎゅうっと抱きしめられ、しかもどさくさに紛れて胸まで揉まれたリーシャは身を強張らせる。

温かい体温が背中から伝わり、金色の髪が肩に当たってくすぐったい。

胸を揉む手は意外と優しく、不思議と痛くはなかった。

いや、痛いとか痛くないとか、そういう問題ではない。

「ん～、予想通り、良い感触ね～」

「ひゃあ、ちょ、イリアさん！」

どうしたらイリアを引きはがせるか。くすぐったい感覚を必死で無視しながら、リーシャは思考をフルに回転させる。
結果。

（……うう、イリアさんが満足するまで待つ、しか思いつかないよ〜）

女神様〜、と心の中で空の女神へと助けを求める。
すると、願いが届いたのか。イリアは胸を揉むにをやめた。しかし依然と背中に引っ付いたままで、珍しく黙りこんでいる。
いつも明るい人がむやみに静かになると、かえって不安になる。
心配になって後ろを振り返ってみると、イリアが真剣な眼差しを向けていた。

「リーシャ、覚えておきなさい」
「え、と……はい」

なんだろう。疑問に思いながらもリーシャは返事をした。酷く戸惑いを含んだ声になってしまったが、イリアは全く気にせずに言い放つ。

「あたしは、あんたのこと絶対に逃がさないから」

「……あの、それはどういう」
「ふふ、アルカンシェルはもうリーシャの居場所よって意味。やめようったって絶対に逃がさないんだから、頑張ってあたしのとこまで駆け上がってらっしゃい」

イリアの言葉にリーシャは胸が暖かくなるのを感じた。

アルカンシェルは、リーシャの居場所。
あの光り輝く舞台が、こんな自分の居場所だとイリアは言ってくれたのだ。
闇の中だけが、生きる場所だと思っていたから。
すごく、すごく嬉しかった。
同時に少し不安になる。

（本当に、私みたいな血塗られた人間がいてもいい場所なのかな？）

始めて見出だした光の道。
心の底からワクワクして、ドキドキして、楽しくて仕方のない場所。
そこにずっといたいと思う。
けれど、それをリーシャの中にいる《銀》が許さない。
その居場所は、導いてくれた人は、あまりにも眩しすぎた。

＃＃＃

夕食を終え、イリアが入浴している時間。リーシャは「好きに読んで良いわよ」と言ったイリアの言葉に甘えて『クロスベルタイムズ』をソファで読んでいた。

（うーん。やっぱり大した情報はないかぁ）

ニュースと政治の記事に目を通したリーシャは半ば予想していた情報量の少なさに嘆息する。

（これはやっぱり、この街の情報屋に頼るしかないかなぁ）

自分だけでも集めようと思えば情報は集めることができる。
しかし、単純に時間が足りないのだ。その上、アーティストとしての練習もあるため疲労のほうも考えなければならない。

（とりあえず、今日はクオーツを作る分のセピスを集めなくちゃ。マインツから時計回りに行って、あとは非合法のお店を探して、調達）

光が強い分、闇も深いクロスベルだ。
探せばクオーツを作るなり物々交換するなりしてくれる店などすぐに見つかるだろう。
ペラリ、と次のページをめくるとそこは観光の記事だ。
頂上に大きな鐘が設置されている高い搭の写真が一面を彩っている。

「星見の搭……」

搭の周りにはたくさんの建物があるのを見て、リーシャは目を細めた。
十分に隠れ家となりえる場所だ。搭に登り上から狙撃する場所も多少無理をすれば幾つもある。
ルバーチェ商会を追い詰めたさい、逃げるとしたらこの場所は地理的に有利だろう。
内部の構造を調べておく必要がある。

（……マインツの方は後にして、まず星見の搭から行こうかな）

星見の搭の写真下を見ると場所が簡単に書かれている。
クロスベル市の南口から出て、ウルスラ街道を少し外れたところにあるらしい。
アルカンシェルに行く前に買った地図を頭に思い浮かべ、リーシャは搭の場所を確認する。

（問題は、イリアさんがいつ熟睡するか）

夜中にこの部屋を抜け出すことは絶対にイリアに知られてはならないことだ。
もしばれたらイリアがどういう行動を取るか、全く予想できない。
突拍子のない行動を取るあの人のことだ。きっとリーシャの憶測を越えるようなことを仕出かすに決まっている。
あの強引さと何者も恐れぬ豪胆さは、こういうときに厄介だ。
……厄介だけれど、嫌ではない。
ここまで考えてリーシャはふと思う。

（なんで、イリアさんのことばかり考えてしまうんだろう）

はっきり言って、リーシャを物理的に束縛できる者は滅多にいない。
イリアだって、こっそりと睡眠薬を塗った針で目立たない首筋を刺してしまえば楽々と立ち回れる。
合理的な思考を持つ《銀》の部分も、それが1番だと言っているのに。リーシャは自然とその方法を選択肢から外していた。
ごまかす自信は十分にある。
イリアは舞台以外の事象にはこだわらない。
だから、大丈夫だ。
なのに。
それをしない。したくないと思う自分がいる。

闇しか知らなかったリーシャに、光を教えてくれた彼女。そのような不義は働きたくない。

（……今は、考えないようにしよう）

パシ、と頬を叩きリーシャはクロスベルタイムズを閉じると本棚へ戻した。

###

あの子は、リーシャは抱きしめられるとき、体を酷く強張らせる。
湯舟に浸かりながらイリアは部屋にいる少女を思う。
今思えば、あれは運命的な出会いだった。太陽と月。
光と闇。
生と死。
なにもかもが対極で、なにもかもが違う。そんな彼女だからこそ、イリアは惹かれた。
数多くいる観客の中、彼女を見つけることができたのは、強烈な引力によるようなものだったのだ。
そして、まだまだ会ってひと月も経っていない間柄であるが不思議なことに少女のことなら例え小さな違和感でもわかる。

（あの子、絶対に寝てないわね）

昨日よりも少しだけ動きにキレがなかった。他にも細かい理由はいくつか挙げられるが、気づいた1番の理由がこれだ。

正直、昨日あれだけ動いた上に一睡もせず今日の稽古をこなしてみせたのには驚いた。
はあ、とイリアは大きくため息をついた。
（体が基本だって言ってるのに。だいたい、慣れない土地に来て精神的にも疲れてるはずなのに、今日は絶対に寝かせないとね！）
意気込んでみたものの、具体的にどうしたらいいのかは思いつかない。
（ん～……あの様子だとあの子、人に触られるのに慣れてないみたいだし……）
初見ならばまだわかるのだが、一日過ごしてあれほどガチガチではイリアでなくともわかる。
普通の人ならば抱きしめられた瞬間は強張っていても、相手が知り合いとわかれば相手にもよるが多少力を抜く。
しかしリーシャはイリアだと気づいても肩の力を抜かず、まるで人に見つめられてどうしたらいいのかわからない子猫のように強張っている。
（……いっそのこと、ベットで一緒に寝ちゃおうかしら）
劇をやっていれば、自然と誰かに触れたり触れられたりする機会が増える。
ここで荒治療しておいて損はないだろう。
問題は、あの迷子の子猫をどうやってベットに連れ込み、自分よりも早く寝付かせるか、だ。
ちゃぷ、と音を立ててイリアは右手を湯舟の中から引き出し、金の髪をくるくると弄ぶ。

（うーん、やっぱり無理矢理押し込むしかないかしら。でも、毎回同じっていうのもつまらないわねぇ）

それ以前に、リーシャよりも起きていられる自信がない。
ならば、ベットに押し込む方法よりも寝かせる方法を考えたほうが良いだろう。

（なにがいいかしら。物語で有名な眠らせ方といえば睡眠薬だけれど、あたしたちアーティストは体が命だし……あ、そうだわ！）

そうと決まれば、それとなくリーシャを誘おう。
イリアは鼻歌を歌いながら湯舟から出た。
最も、これから被害に遭うリーシャからすればその美しい歌は地獄からの声に聞こえただろう。

## 戦いの風呂上がり

「リーシャ～、いらっしゃーい！」

お風呂から上がると、楽しげな声でリーシャを呼ぶ声がリビングから届いた。

妙に楽しげな声に首を傾げ「はーい」と返事をしながらリーシャはリビングへと向かうと、そこにはソファにもたれ掛かり、手にはワインが並々と注がれたグラスを握っているイリアがいた。

「うんうん、頬が真っ赤でいつにも増して良い女になってるわよリーシャ」

頬を真っ赤にして手招きするイリアに、リーシャの顔が引き攣る。

（真っ赤になってるのはイリアさんの方じゃないですか）

呆れながらもテーブルに視線を向ければ、そこには開封済みの酒瓶が三本。未開封の瓶が五本置かれている。この人はいったいどれだけのお酒を飲む気だ、と思いながらリーシャはなぜか置いてある手付かずのグラスに水を注ぎ、イリアの隣に座った。

「イリアさん、そろそろやめて寝た方が良いですよ。明日も稽古、あるんですよね」

「あるけど大丈夫よ。日常的に飲んでるし、リーシャが起こしてくれるからねぇ」

「それもどうかと思います」

くっつこうとしてくるイリアを押しやりながら、リーシャはイリア

の手にあるグラスを引ったくり水が入ったグラスを代わりに握らせる。

「あら？」

濃い紫色の液体ではなく、透明な水に変わってしまったグラスを見てイリアが首を傾げる。

さすがに手際が良すぎたか？　と不安になるリーシャだったが次にイリアが起こした行動によって不安は消し飛んだ。

「そー、れぇ！」

「きゃあああ！」

なんと、イリアはテーブルの上に置いてある瓶を手に取ると、リーシャの口に突きこんだのだ。

ゴクリ、ゴクリ、と瓶の中身がリーシャの体内へと流れていく。

熱い。喉がとんでもなく熱い。

まるで火炎放射器を突っ込まれているような熱さにリーシャはイリアの手を押し返す。

しかし喉の奥ぎりぎりまで突きこまれているせいで酸素が足らず、振り切ることができない。

そうして、ほどなくして。

瓶の中身は空になった。

「げほっけほ……」

「よっし、大成功！　　ふふん、これで今日はリーシャもぐっすり眠れるわね」

酸欠になったリーシャの体が酸素を求めているなか、イリアは満足げに笑っている。ああ、本当にこの人はなんてことをしてくれたん

だ。

（私、まだ、未成年なのに……）

体が熱い。頭もなんだかぼんやりする。
全部が全部、正常に機能していない。

「あ、足りなかったらまだまだあるわよー」
「……いりません」

笑顔で瓶を左右に降るイリアにリーシャはまず後悔した。
警戒を怠り、なおかつこうなることを予測できなかった自らを。

「だいたい、イリアさんは……強引すぎます。いえ、アルカンシェルのことについては本当に感謝してますよ？　すごく楽しいですし……」
「うんうん、あたしもあんたが入ってくれて嬉しいわよ」
「でも、でもですよう？　さすがに、お酒を口に突き込むのはやり過ぎです！　わたしまだ未成年ですよ！」

ぐだぐだと文句を言うリーシャを、イリアが楽しげに見ている。
というのも、真っ赤な顔で文句を言うリーシャの瞳は濡れており、焦点があっていないのだ。加えて、イリアの方が背丈が高いおかげでどうしてもリーシャは上目遣いになる。
なんというか、物凄い色気があるのだ。

「うううう……今日、いろいろとやらなきゃいけないことがあったのにぃ……」
「やらなきゃいけないこと？」
「そうです……いろいろと……あとひと月しか……」

時間がない。
その言葉を紡ぐことなく、リーシャは夢の中へと落ちた。

###

「すぅ……すぅ……」

酔っ払い、くにゃくにゃになってソファにもたれ掛かる可愛い後輩を横たわらせ、イリアは向かいに座った。

「よっし！　お酒で眠らせちゃえ作戦、大成功～」

穏やかな寝息を立てるリーシャの向かいでイリアはワインが注がれたグラスを天井高く上げる。
そして勝利の美酒、とでもいうかのように一気に中身を喉の奥へと流し込む。

「いや～、ここまで上手くいくとは……正直思わなかったわ」

満足げな表情でグラスにワインをたっぷりと注ぎ、イリアはそれを味わいながらリーシャの眠るソファへと近づいた。

ジーッと穴が開くほどリーシャを見つめたあと、イリアはあどけない寝顔でぐっすりと眠る彼女の頬をつっつく。

「わ、ぷにぷにじゃない。これが若さってやつね！」

一晩寝ていないくせに至高の弾力ときめ細やかさを誇るリーシャの肌を、イリアは嫉妬の念を込めてぷにぷにする。
しかしそこはさすがのイリア・プラティエ。
ぷにぷにと頬をつっついている内に嫉妬など吹き飛び、今はまるで新しい玩具を手に入れた子供のような無邪気さを持って突き始める。
しまいには

「ううん、この弾力、癖になるわね。ふふふ、どれだけ伸びるのかしら。このほっぺ」

突くだけにあきたらず、頬を横に引っ張る始末。
しかもまた、これがよく伸びる。
リーシャがぐっすりと寝ているのを良いことにやりたい放題だ。

「はあ～、満足満足。そろそろ寝ようかしらね」

テーブルの上に置いてある瓶をすべて空にして、イリアはリーシャを背負ってベッドへと向かった。
あれだけ頬を弄り倒されたにも関わらず、静かな寝息を立て穏やか

な寝顔を見せているリーシャは、やはり相当疲れていたのだろう。
そのことに、イリアは呆れた。

（まったく。自分のことを顧みなさいっての）

自分の限界がわからない、ということではないのだろう。
いや、むしろ今日の動きを見るに自分の限界という名の体調を完璧にリーシャは把握している。
徹夜はその分析の上での結果だ。
ただ、どうやらあそこまで激しい稽古になるとは思わなかったらしい。
イリアの部屋まで帰るのに、リーシャが道中へろへろだったのをイリアは記憶している。
その上で、リーシャは無茶なことに今日も徹夜をしようとした。
彼女がなにをしにクロスベルに来たのか、イリアは知らない。
ただ、それはリーシャにとって重要な用事だったのだろう。
無茶を押し通すほどの。

（ひと月、ねぇ）

そのひと月がなにを意味するのか、イリアにはわからない。
だが唯一、イリアにわかることがある。
それは、リーシャを絶対に逃がしてはいけないということだ。

（あんたが今まで何をやってきたのか、あたしにはわからないわ。
でも――）

リーシャをベッドに押し込み、イリアもベッドの中へと入る。
そして、深い眠りについている彼女をそっと抱きしめ、自分とは真逆の色合いを持つ髪を優しく梳いた。

「この手は絶対に放さないから、あんたも放しちゃダメよ。リーシャ……」

## 思い出リボン

「……っ」

頭に走る鈍痛に、リーシャはゆっくりと目を開けた。静かに体を起こそうと力を入れるが、なにかに巻き付かれていて動けない。
さらに言うと、目を開けているはずなのに暗い。
どうやら暗い場所に、リーシャはいるらしい。それにしてはなんだか暖かいところだが……ここまで考えて、ここに来る前後の記憶がないことに気付く。

（とりあえず、できるだけ思い出してみよう）

リーシャの感覚で、昨日。昨日、リーシャはイリアを起こし、アルカンシェルに向かった。
それから稽古をして、終わってからイリアの部屋にお世話になって、そして――

（そうだ……お酒、飲まされたんだ。一本まるごと）

この頭痛は二日酔いによるものであるのは間違いない。
それはわかった。
しかし自分が寝ている場所はどこなのか、という根本的な問題の解決にはなっていない。

（イリアさんの部屋に間違いないと思うんだけれど……）

耳を澄ませば、まず最初に小鳥の囀りが聞こえる。次に下の階で朝ごはんを作り始める音。部屋の外へ慌ただしく出勤する音。車の走

る音。
そして――1番近くから、女性とは思えないイビキが聞こえる。
（……）
嫌な予感がする。
リーシャは無意識に握っていたらしい布から手を離し、できる限り最小限の動きでその場所から横に離れる。
「ん～……？」
途中、ペタペタと叩かれ元いた場所に引っ張られそうになったがなんとか持ちこたえた。
それから数センチ。
横にズレると暖かいなにかから抜け、体が重力に従って下へと落ちた。
落下音を最小限に抑えるため受け身を取り、静かに立ち上がる。
そのさい、頭痛が激しくなったが眉を数ミリ動かす程度に留めて視界をさっきまでいた場所に向ける。
予想通り、そこにはイリアが寝ていた。全裸で。まるで誰かを抱きしめていたような格好をして。
リーシャの顔からサーッと血の気が引く。
「なに……これ……」
一体全体何があったのか。
記憶を探してみるが、思い出せるのはイリアに酒を飲まされたところまで。

「え、ええっ？」
本当に、何があった。
なんでイリアは全裸なのだろう。
「ちょ、イリアさん！　起きてください！　イリアさぁんっ！」
最早平静ではいられない。
なにをしたのか覚えていない、というのはリーシャにとって恐怖だった。
性格は違えど、自分の本質は伝説の凶手《銀》だ。大剣や暗器が主な武器だが、丸腰でも十分に人を殺せてしまう。
しかも、人を殺すことに抵抗などまるでないのだから質が悪い。
そんなものが心の根本にあるのだ。
酒に酔って理性があやふやになっている状態で、自分がなにをするのか。見当もつかない。
もしかして、自分なんかとはまるで違うイリアを。
掛け替えのない太陽を、他ならぬ自分の手で汚してしまったのでは――。
悪い想像ばかりが飛び交う中、イリアがけだる気に起き上がった。
「ふあ～……。どうしたの～、リーシャ。まだ時間じゃないわよ～。ていうわけでおやすみ」
そう言って毛布に潜ろうとするイリアを、リーシャが急いで止めた。
「ま、待ってくださいイリアさん！　何があったんですか、昨日！」
「ん～、昨日？　リーシャと熱い夜を過ごしたわ」
毛布の引っ張りあいをしながらモゴモゴとイリアが答える。
情報量があまりにも少ない内容に、しかし冷静でないリーシャはそ

れを真に受けてしまう。
「……え。あ、あの、ええっ！？」
赤くなったり青くなったり。
面白いように変わるリーシャの顔色に、完全に起き出したイリアがケタケタと笑い声を上げた。

###

「フフフ、リーシャもやっぱり想像力豊かな若者ね～」
「誰だって隣に裸で寝ていたら勘違いもしますよ……」

中央広場の百貨店に来る途中、リーシャはイリアが裸で寝ていた訳を聞いた。
話しによると、酔い潰れたリーシャを抱えて一緒に寝たところまでは服を着ていたらしい。
しかしリーシャの体温が思いのほか高く、イリアは寝苦しかった。
理由は割愛するが、どうしてもイリアはリーシャと寝たかったのだ。
が、寝苦しくて眠れないという緊急事態が起きた。
そこで、イリアは服を脱ぐことによって体温を調節したのだ。

「もしヤってたらあたしがリーシャの服を脱がしてたわよ。あ、今思えば惜しいことしたわね」
「もう、イリアさんったら……ところで、今日はなんで百貨店に来たんですか？　稽古の時間はまだですけど……」
これ以上弄られるのは少々恥ずかしいものがある。リーシャは無理矢理に話題を変えてなんとか流れを越えた。
幸い、イリアの方もリーシャが見つけた話題に「ああ、それはね」と乗ってくれる。
リーシャはひとまず安堵の息をついた。
「食料を買いに来たっていうのもあるんだけれど、半分はあんたの用事よ」
「私の、ですか？」
まったく見当がつかない。
首を捻るリーシャの腕を引っ張って、イリアは百貨店の2階へと向かった。
中央広場にある百貨店は1階に日用品、2階に服などの装飾品と別れている。
だからこそ、リーシャはわからなかった。
服はもともと長期間滞在する予定があったため普通に過ごす分にはまったく問題ない。
2階に着くとイリアは一目散に頭につける装飾品売り場へと向かった。リーシャは戸惑いながらもイリアの後についていく。
「んー……」

ズラリと並べられている多種多様な色のリボンたちを真剣に物色し始める青い瞳。
最初はイリアの意図することがわからなかったが、チラチラと交差する視線にようやくリーシャはイリアの考えていることがわかった。

（もしかして、イリアさんは……私のリボンを、選んでくれてる？）

もし本当にそうだとしたら、嬉しい。すごく嬉しい。
誰かと一緒にお店に行って、誰かに選んでもらうなどリーシャは今までなかった。
各地を転々としていたのもある。
でも、１番の理由はリーシャ自身が薄い壁を他者に作ってしまっていたことだろう。
すごいなぁ……とリーシャは感動にも似た思いを抱いた。
素敵な世界、美しい舞台、お日様のように温かな日常。それから、楽しいショッピング。
リーシャが諦めて、知ろうとしなかった光の世界を、イリアは次々見せてくれる。

「リーシャ、ちょっと来なさい」
「はい」

どうやら決まったらしく、イリアは満面の笑みで呼んだ。
駆け寄ってみると、その手に握られているのは真っ白なリボンだった。
何者にも汚されていない純白のリボン。

「ちょっと失礼するわよ」

近くまで寄ってきたリーシャにそう言うとイリアは素早くリーシャの背後へと回った。

「あの、イリアさん？　なにを……」

「試着よ、試着。動いちゃダメよ～」

言うよりも早く、イリアは真っ黒なリボンを外し代わりに白いリボンで元通りに結い直す。

手際よく、意外に繊細な手つきにリーシャは心地好さを覚えた。

（お母さんがいたら、こんな感じなのかな？）

ほわほわして、ぬくぬくで、満たされる。

感じたことのない温もりにリーシャは体の力がほど良く抜けるのを感じた。

完全なリラックス状態。

立ったままでも眠れそうだ。

暗殺者としては失格なのだろう今の状態に、しかしリーシャは幸せを感じていた。

またひとつ、父を失望させてしまう要因だったけれど、不思議と焦燥はない。

「よし、できたわよリーシャ。鏡で見てみなさい」

「あ、はい。ありがとうございます」

イリアの声によって現実へと戻る。差し出された鏡をお礼を言いながら受け取り、それを覗き込む。

すると、さきほどとは違った白いリボンを付けた自分がいた。

（わあ……）

なんとも言えない感慨。
白なんて似合わない、と思っていたが紺色の髪にとても合っており、良い具合にアクセントになっている。
でも、１番嬉しいのはそれをイリアが選んでくれたことだ。

「うんうん、あたしの予想通り似合ってるわ」

満足げに笑うイリアに、リーシャは満面の笑みで答える。クロスベルに来て以来、いや今までの人生でも最高の笑みを浮かべて。

「ありがとうございます、イリアさん！　このリボンは大事に大事に使います」

## 思い出リボン（後書き）

次からは急ピッチで時間を進めようと思いました今日この頃。

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました！

## 情報屋

「フン、ここがジオフロントB区画か。本当に、ここに情報屋とやらがいるんだろうな」

太陽が沈み、月が闇夜を照らす時間――黒衣に身を包み顔に覆面を付けた《銀》は住宅街にあるジオフロントと呼ばれるクロスベルの地下に来ていた。
本来、ここに入るためには市庁舎の鍵が必要だが、そこは秘伝の隠密術《月光蝶》の応用である壁抜けを使用しなんなく侵入することに成功。
現在はこの地下通路のような場所にいるという情報屋を探索中だ。

「……しかし、魔獣の気配がやたらとするが、ここにいる情報屋はある程度武術の心得が――ん？」

偶然仕入れた情報屋について憶測していると、一つのダクトが銀の感覚に引っ掛かった。
鉄格子のようなもので塞がれているが、近くに寄ってよく観察すると人が頻繁に通っている跡がある。

「……見込み違いか？」

ジオフロントの魔獣と軽く渡り合える実力の持ち主かと思えば、そうではなかったらしい。
それはそれで銀にはなんら問題ないことだ。銀が必要としているのはあくまで情報。黒月からの依頼に応じるために必要な情報さえ集まればどうでも良い。
鉄格子を外し、ダクトの中へ入る。ダクト内は縦横ともに人一人が

入るにはぎりぎりの大きさだ。
音が反響するダクト内を出来る限り足音を立てずに進んでいく。
そうすることしばらく。
水の流れる音に混じって、なにやら賑やかな音楽が聞こえてきた。
「フン、ジメっとしたところに住んでいるわりには陽気な音楽だ。
さて、鬼が出るか蛇が出るか」

例えなにが出ようとも、力で捩じ伏せるだけだが。
ダクトを進んでいくにつれ、陽気な音楽はだんだんと大きくなっていく。実際の音量はこれほど遠くまで――少なくとも出口が見えない場所まで届くようなものではないことは断言できる。
極々小さい音を捉えられるのは、ひとえに幼い頃からの鍛練の賜物だ。
しばらく足を動かしていると、ようやく導力灯の明かりが見えてきた。
気配を完全に断ってダクトの外に出ると、正面に大きな扉が一つ、脇に小さなドアが一つ存在している。音楽が流れているのは脇の小さなドアからだ。

「……」

銀は静かにそのドアへと近づき、手をそっとドアの近くの壁に付けた。
それから、感触を確かめるように手を壁へと沈めたり戻したりしている。
銀の主な隠密術である《月光蝶》は、己の存在を周り空間と完全に同化することによって気配や存在を相手から認知できないようにしている。それの応用である壁抜けは、空間ではなく、通り抜けたい物に同調することによって物体をすり抜けるという行為を可能にし

ている。
もちろん、普通の人がやろうと思ってもこればかりはできない。《月光蝶》を始めとする空間同調技術は特殊な体質があって初めて可能になるのだ。
銀の技術がなぜ一子相伝なのか、その理由はここにある。
ただ、いくら特殊な体質があっても壁抜けは容易ではない。

（うん、これならなんとか行けるかな）

場所によって、同調しやすい場所と同調しにくい場所があるのだ。
それらを通り抜けられるかは、完全に使用者の技術による。
銀は壁抜けができることを確認すると、一気に情報屋がいるだろう部屋へと突入した。

###

「へへ、楽勝楽勝。こうも簡単にミラ稼ぎできると人生舐めちゃいそうだぜ」

軽快な音楽が大音量で流れる中、椅子に座って導力ネットを見ながら少年は愉快だと笑う。
そばかす少年はクロスベルに来てから早数ヶ月。財団で得た知識を有効活用して情報屋となった。
今ではお得意様もそれなりに付き、なにもかもが上手くいっている。
いまだ１３歳の子供が、こうも簡単にミラを稼げると本当に人生舐めてしまいそうである。

今回の仕事も特に苦もなく終わらせた少年は上機嫌でピザにかじりつく。

「まず……。冷めたピザなんて食えたもんじゃないな。今度からは仕事が終わってから頼むか」

「情報屋ヨナ・セイクリッド殿で間違いないな」

固まったチーズとパサパサしたきじに辟易していると、そんな言葉が掛けられた。

少年は、反射的に振り向き、後ろに立っていた黒衣に覆面の男を見て――

「わあああああああああああっ！」

少年は叫びながら椅子から転げ落ちた。

まさか、こんな子供が情報屋だなんて……と予想を大分下回る情報屋の年齢に銀は内心驚いていた。

しばらくして、ようやく落ち着いた少年に銀は自分が客であることを伝えた。

これから長い付き合いになるだろう情報屋だ。いくら幼くとも、今までやってこれたということはそれなりの腕を持っていることは確か。

これ以上信用を落とすことがあっては支障が出るかもしれない。

そう思っての行動だった。

「つまり、あんたは客としておれんところに来たってわけだ」
「ああ。改めて――お初にお目にかかる。《銀》というものだ」
「銀……じゃ、あんたのことは銀の旦那って呼ばせてもらうぜ」
くるり、とヨナは椅子ごと回る。大分自分のペースを取り戻したようだ。
「承知した。では、貴殿のことはセイクリッドと呼ぼう」
「オーケー。で、なんの情報が欲しいんだ？　東西南北、導力ネットで調べられることならなんでもわかるぜ。ミラはきっちり取るけどな」
そばかすが特徴的な顔に不適な笑みを浮かべるヨナに、銀はしばし考える。
一応、手持ちはそれなりにある。ミラだとかさ張るので銀耀石の結晶をいくつか持ってきた。一つ一万ミラは軽いだろう。
「ルバーチェ商会の情報――それも主力の情報が欲しい。あとはクロスベルの最新の情報もだ」
「ルバーチェ商会？　旦那、怪しい格好してるけどやっぱそっちの人か」
「詮索はなしだ。気になるのなら、情報屋らしく自分で調べたらどうだ」
「……へいへい、そうするよぉー」
子供ながら、線引きはできているらしい。
正直半信半疑だったが、これならば多少は信用できる。
カタカタとキーボードを叩く少年。
しかし、と銀はテーブルやキーボードの脇に置かれたピザの箱に視

線を移した。

（さすがに、健康に悪いと思うんだけどなぁ）

ピザ以外の箱が見当たらない。
飲み物も炭酸飲料など甘い物ばかりで、お世話にも健康管理がなっているとは言い難い。
銀であり、一介の客でしかない私が言えることじゃないけれど……。

（いや、でも万が一何かの病気になられでもしたら困るしなぁ）

情報は多ければ多いほど良い。
情報ソースはまだまだあるが、しかし導力ネットからの情報を仕入れることができるのは現時点で彼しかいない。

「おい、まさか毎日ピザを食してるのか？」
「ん、ああ、そうだぜ。熱いのが1番うまいんだ。冷めるとめっちゃまずいけどな」
「……」

想像通りの答えに銀は黙り込む。
やっぱり、たまになにか作って持ってきたほうが良い気がする。

「な、なんだよ」

妙なタイミングで訪れた沈黙に耐え切れず、ヨナが声を上げた。
銀は逡巡したあと、

「今度、栄養のあるものを持ってきてやる。病気にでもなられたらいい迷惑なのでな」

「はあ！？　ちょっと待てよ旦那。なんでそうなんだよ」
「フン、言っただろう。病気になられたらいい迷惑だ、と。栄養バランスが悪すぎる」
「い、いらねぇよっ、そんなもん」
「黙れ。それに、終わったのだろう？」

画面に映し出された数々の文字や写真をあごでさす。
ヨナは不満たらたらで「ああ」と返事した。それからくるりと椅子ごと横へ移動する。
勝手に見ろ、ということらしい。

「ほう……ルバーチェの主力はガルシア・ロッシか。《西風の旅団》出身の元猟兵。なるほど相当腕がたちそうだ」
「へへっ、これくらいはちょろいぜ」
「貴殿の腕は確かだったようだな。本当によく調べられている」

膨大な情報を簡潔にわかりやすくまとめる情報処理能力には銀も舌を巻いた。
なるほど、巷で有名になるのもわかる。
ルバーチェの主力のみではなく、密売などのルートまでも表示されており銀はそれらを頭にしっかり刻み付ける。

「報酬はこれで良いか？」
「ん～？　お、銀耀石の結晶か！　すっげーこんなデカイの初めて見たぜ」

ポケットから出した銀耀石の結晶を手渡してやると、ヨナは目を輝かせた。
お気に召したようで、銀も胸を撫で下ろす。

「では、また来る。今宵はこれでさらばだ」

## 情報屋（後書き）

ヨナの口調とキャラが曖昧ー。
そしてキャラが微妙に崩壊しているという罠。

そして、時間軸がこれからぴょんぴょん飛びます。
予定では黒月登場させて、ルバーチェと何度か対決して、ちょこちょこアルカンシェルの話しを混ぜたら原作に突入したいと思います。
そして、その原作ですが、おそらくちょっと変わった方向に行くような気がします。大筋は変わらないと思うんですが……。

まだまだどうなるかわかりませんが、これからもよろしくお願いします。
ここ違うよー、てご指摘がありましたら遠慮なくどうぞ。

では、ありがとうございました。

## 新居のこと

「ふう……」

アルカンシェルの休憩時間、リーシャは一人楽屋でため息をついた。練習がハードだった、というのもあるが銀の仕事があと数日で本格化することが、リーシャに重いため息を吐かせた。

幸い、このため息を聞いている者はいない。休憩時間である今、アーティストのほとんどは正面観客席で談笑を楽しんでいるか、衣装担当のカレリアさんに衣装の手直しを頼んでいるかのどちらかだ。

（銀の仕事が本格化したら徹夜なんてこれでもかってくらいあるだろうし……。イリアさんは鋭いから、ごまかすのにも限界があるし……）

イリアはリーシャが徹夜していることを簡単に見抜く。最初にお酒を飲まされた日から何度か徹夜をしたのだが、次の日にはすぐに指摘された。

徹夜の理由を問い詰めないところが強引で舞台命、なイリアらしくないが、もしかしたらあれで結構気を使っているのかもしれない。

そこに付け込めばやっていける――そんな案が自然と頭に浮かぶ。

リーシャは途端に嫌悪した。

なんて汚い。

別の生き方を教えてくれた恩人には、できる限りの恩を返したいのに。なのに恩を仇で返すような考えしか浮かばない。

最低だ。こんな私が、あんなに素敵な舞台にいて本当に良いのだろうか。

そう思いつつ、踊りたい。あの人の側にいたい、という気持ちが抑えられない。

（ごめんなさい、イリアさん）

どこまでも我が儘で、不誠実な自分。イリアに心の中で謝罪し、リーシャはポケットからクロスベル市内の地図を取り出した。地図の所々には裏通りを中心に筆で印が付けられている。
地図の脇には東方の言語で、ルバーチェ商会の持つ密売ルートが書かれている。
その下にリーシャは昨夜調べたルートの一つを書き足した。
それからクロスベルの地図にライン――主な逃走経路を書き足していく。赤が地上。青が地下だ。
慎重に書き足しながらも、感覚は全開で近づく気配は虫一匹さえも捉える。

（……うん、こんなところかな。人も来たし、今日はここまでにして稽古に集中集中）

地図をしまい、心を入れ替えるために頬を叩く。
時計を見ればあと数十分で休憩時間も終わりだ。リーシャは午後の稽古に備えて用意していた水を喉へ流し込んでいく。
こくり、と口内の水を飲み干すと同時に楽屋の扉が開いた。

「あら、リーシャじゃない」
「あ、こんにちは、プリエさん」

扉の奥から現れたのは《神秘の歌姫》プリエだった。
リーシャは大先輩であるプリエに頭を下げる。
プリエはにこり、と笑顔で挨拶を返すと、1番奥の鏡台へと向かった。それから鏡台の引き出しをガサゴソと探る。
一体、何をしているのだろう。

部屋の隅でプリエの行動を見守っていると、ついに目的の物を見付けたらしい。
顔を輝かせると、プリエは鏡台の引き出しから小さな袋を取り出した。その袋の中には十枚ほど、クッキーが入っている。

「やっぱり、稽古のあとは甘い物よね～。リーシャもどう？」
「いえ、私は……」

クッキーを一枚差し出してくるプリエに、リーシャは申し訳なさそうに遠慮した。
問題山積みな今、なにかを胃に入れたくなかった。特に空腹なわけでもないし。

「そう？　おいしいのに……」

残念そうにクッキーをかじるプリエ。
これは一枚でもクッキーをもらって無理矢理胃に押し込むべきだったか、とリーシャは後悔する。
ポリポリ、とプリエが三枚目のクッキーをかじる中、リーシャはこれからどうするべきか、思考を巡らせた。

（とりあえず、どこか住むところを決めないと。イリアさんにこれ以上迷惑は掛けたくないし……）

結局この半月の間、食費はもちろん、服までお世話になってしまった。
二足のわらじ状態になりつつある今、一緒に住んでいてはきっと近い将来、迷惑をかけてしまうだろう。

（銀とアルカンシェル……今まで以上に体調には気を使わなきゃ。

はあ……安くて人通りの少ない好物件、どこかにないかなぁ……）

クロスベル市の地理についてはある程度知識がついたが、住居についての情報は集めていなかった。

そして、引っ越しの手続きも知らないことにリーシャは気づく。

（うう、やることがまた増えた……。いくら百年分の銀の知識があっても、引っ越しとか表の知識は少ないからなぁ……）

迷惑を承知で、イリアに聞いてみるしかない。

なにより、今まで居候させてもらっていた身だ。このまま何も言わずに去るのも失礼だろう。

## 新居のこと（後書き）

はい、旧市街入りをちょっと早めました。
ところで原作だと旧市街入りは一章からでしたが、いつからリーシャはイリアの部屋に居候してたんでしょうね。
というか、イリアの部屋にいながらも銀のお仕事をしていたって、それよく考えたら大変ですよね。
よくばれなかったなリーシャ。さすが銀？
いや、イリアさんなら気付いてても言わないかな？

と、いうことで次回は引き続き住居探しです。

## 新居のこと　2

「うんうん。大分舞台装置にも馴れてきたみたいね」

「あはは……。でも舞台装置ってすごいですね。反重力装置まであるなんて。確か、飛行船にも使われてる技術ですよね？」

「ええ。最高の舞台を作り上げる要素だから、それなりに気を使ってるのよ」

舞台装置に使われている最新技術にリーシャが感心すると、舞台装置のスイッチを切ったイリアが得意げに笑う。

「でも、まさかこんなに早く形になるとは思わなかったわ。反重力装置って、馴れるまでが大変なのよね～。はい、飲み物」

「あ、すいません。ありがとうございます」

ぽい、と投げ渡された水筒を受け取りリーシャは（あれ？）と疑問に思いながらも頭を下げた。

確か水筒は鍵付きロッカーの中に入れて置いたと思うのだが……。

「そうそう、その水筒の中身ってなに？　今朝、なんか混ぜてたみたいだけれど」

「緑茶です。東方に伝わる娯楽品の一種ですね。でも、薬用効果もあるので薬草茶と言ったほうがわかりやすいかもしれません」

「へぇ……どうりで不思議な味がすると思ったわ」

「イリアさん、飲みましたね？」

いや～。それにしても数日で反重力に馴れるなんて、期待以上で嬉しいわね～。

なんて言いながらイリアは舞台裏へと逃げるように消えていく。

まったく、あの人は……とリーシャは呆れながらもさきほどの稽古の手応えを感じていた。

反重力は確かに最初、戸惑いはしたが高いところから飛び降りるときに体験しているので早く馴れることができた。

ただ、その影響下で身体を回転させ続けるのは思いの他大変だったが。

（でも、楽しい。次はどんなことやるのかなぁ）

銀としての技術や経験が、このキラキラした舞台で活かされるのはリーシャとしても嬉しい。生まれ変わる気分だ。

（銀……あれ、なにか忘れて……）

午後の休憩時間に入り、リーシャも舞台裏へと引っ込もうとしたとき。ふと、思い出した。

「ああっ！」

突然声を上げたリーシャに、舞台装置の微調整をしていたハインツが驚き、肩を震わせた。

「ど、どうしました？　リーシャさん」

「え、あ、すいませんハインツさん。驚かせてしまって」
ペコペコと謝るリーシャにハインツはいえいえと独特の声で答える。
「本当にすいません」
「いえ、気になさらないでください。それより、どうしたんですか？　リーシャさんが大声を上げるなんて、珍しい」
本当に申し訳ない。
「いえ、その、いつまでもイリアさんのお世話になるわけには行かないので、どこか住むところを決めないと、と思って」
慌てふためきながら答えるリーシャに、ハインツは合点がいったと頷いた。
「なるほど。それで稽古に集中して忘れていて、今思い出した、というわけですか」
「はい……お騒がせしました」
言い当てられ、リーシャは恥ずかしそうに俯いた。
「いえ、幸い装置から手が離れているときでしたのでお気になさらないでください。住居の件、なにか私にできることがあればなんでも相談に乗りますよ」
「ありがとうございます。でも、今までお世話になったお礼もあるのでイリアさんに聞いてみようと思います。では、失礼しました」

午後の休憩時間になり、リーシャは当初の予定通りイリアを訪ねた。イリアは楽屋のベンチに座っており、プリエからもらったらしいクッキーを食べている。

「イリアさん」
「あら、リーシャ。なに？　あたしに相談事？」
「正解です。隣り、失礼しても良いですか？」

さすがに立ったままでは話しずらい。
イリアは返事の代わりに一つ横にずれ、一人分のスペースを空けた。
リーシャはそこに座る。

「で、相談事って？」
「はい。あの、そろそろイリアさんのお世話になるのはいくらなんでもあれなので、どこか安いアパルトメントを借りようと思うんですけど……」
「ええっ！　別にいくらでもいてくれて構わないのに」
最後の一枚を飲みこみ、袋をごみ箱に捨てながらイリアは不満の声を上げた。

「いえ、これ以上お世話になるわけにはいきません。それで、安いアパートを借りたいんですけど、お引越しとか今までしたことなく

て」

困った顔で言うリーシャに、イリアは逡巡する。指をあごに当ててしばらく考え込むと、イリアは諦めたように息を吐いた。

「ん～。まあ、リーシャが決めたことだからしょうがないか。お引越しの手続きは市庁舎に行って、受付の人に言えば勝手にしてくれるわ。あと、アパートの方も受付の人が紹介してくれる。あ、あんまり安いアパートはやめておきなさい。治安が悪かったり、なにかしらの問題があるから」

「はい。市庁舎の受付で尋ねれば良いんですね」

「ええ。善は急げ。今日の稽古はこれで引き上げて、さっさと決めてらっしゃい」

イリアはリーシャの背中をどん、と押す。おそらく言葉通り心配事は早めに片付けて稽古に集中しなさい、ということだろう。

「なにからなにまで本当にありがとうございます」

リーシャはベンチから立ち上がり、ペコリと頭を下げて楽屋から出ていく。

休憩時間は３０分。

それまでに決まると良いな。

いや、３０分以内に良い物件を見付けてみせよう。クロスベル市にはアパートなんてそれこそ星の数ほどある。

しかしその１０分後、リーシャは自分の考えが甘かったことを思い知る。

## 新居のこと　3

クロスベル東通りの隅に立つ赤を基調としたエキゾチックな建物『龍老飯店』。
宿屋としても機能している東方料理専門店のカウンターで、リーシャは重いため息を吐いた。

「はぁ……パンフレットもらえたのまでは良かったんだけれど……」

ぺらり、と様々な住居が載っているページを流し読みしていく。重点的に見るのは家賃だ。
アルカンシェルの新米アーティストであるリーシャ・マオがぎりぎりやり繰りして行ける住居。それが第一条件だ。
一応、新米アーティストとしてアルカンシェルからそれなりに給料が出ている。新米なので雀の涙ほどだが。
一人暮らしするならもう少し給料上げないと暮らせないんじゃ、とイリアは心配してくれ、さらには家賃だけでも払うと言ってくれたがリーシャは丁重に断った。
アルバイトで貯めたお金があるので、と。
実際はアルバイトどころか本業だ。ミラだって、吐いて捨てるほどあったりする。
使い道が武器の整備や調達のみなので、毎回依頼人から莫大なミラを取るわりには十分な貯蓄ができるほどだ。多分、かき集めれば一生遊んで暮らせるぐらいあった気がする。いやニ、三代ぐらい遊べるかもしれない。

（はあ、お父さんが稼いだ分もあるから管理が大変なんだよね……）

リーシャが持っているには不相応な額だから、銀行に預けるわけにもいかない。
結果、埋めたり隠れ家の地下に隠したり、新しい隠れ家を作ってそこに隠したり。どうしても無理な場合は、匿名で寄付したりする。

「う～ん……。とりあえず、休憩しようかな」

リーシャはパンフレットのページに折り目をつけて閉じた。それを右に除けた後、カウンター寄りに立て掛けてあるメニューを取る。炒飯、麻婆豆腐、ラーメン。最早懐かしいとも言える料理の数々。最後のページには烏龍茶などの飲み物や、杏仁豆腐などのデザートが描かれている。
リーシャはメニューを数回見直した後、近くで会計をしている男性店員に声を掛けた。

「すいません、注文良いですか？」
「へい、ただいま」

素早い手つきで店員はメモとペンを取り出す。
おそらく、接客業に関してはベテランなのだろう。

「あの、麻婆豆腐一つお願いします」
「麻婆豆腐一つ、と。注文は以上で？」
「はい」

さらり、とほぼ一筆書きでリーシャの注文を書くと店員は厨房に向かって「麻婆豆腐一丁！」と叫んだ。
リーシャはメニューを閉じて元の場所に戻すと、除けていたパンフレットを再び開く。折り目を付けた場所を開き、家賃だけを確認し

て次のページを開く。
住宅街、西通り、東通り、と区画別に別れたパンフレット。次のページは旧市街だった。

「そこの娘さん。悪いこたぁ言わねぇ、旧市街だけはやめときな」
「え？」

まさか誰かに話しかけられるなんてことを想定していなかったリーシャは、自分に掛けられた言葉に目を丸くする。
顔を上げると、さきほど注文を取ってくれた店員がいた。

「えと……あの？」

困惑気味に店員の顔を見る。視線を受けて、店員は罰の悪そうな顔で自己紹介した。

「おっとわりぃ。俺の名前はフェンだ」
「あ、はじめまして。リーシャ・マオです」

リーシャもぺこりとお辞儀をする。

「あの、旧市街はやめたほうがいいってどういう……？」
「言葉通りの意味さ。旧市街ってのはクロスベルの中で1番治安が悪い。二組の不良がしょっちゅう喧嘩してやがるからな。リーシャちゃんみたいな子が行ったら絡まれちまうぜ？」
「そ、そうなんですか……」

フェンの忠告に、リーシャは曖昧に頷いた。
実際、不良の方は万が一襲われてもあしらえる。それは問題ない。
フェンの善意を無駄にしてしまうようで少しだけ悪い気がするが。

重要なのは家賃だ。
リーシャはフェンの忠告を吟味する。
治安が悪いということは家賃は安い。それにくわえ、良い具合に人通りも少なそうだ。
好物件が見つかりそうな予感にリーシャの気分が晴れる。

「ありがとうございます、フェンさん」
「いやいや、旧市街なんて危ないとこにリーシャちゃんみたいな可愛い子を行かせられねぇからな」
「いえいえ。フェンさんって優しいですね」
笑顔でお礼を言うと、フェンはうっすらと顔を赤らめて奥へと消えた。
リーシャはそれを見送ると再びパンフレットに目を落とす。

（すいません、フェンさん。せっかくのご忠告を無視する形になりそうです）

旧市街のページに記された数々の物件。すべてがリーシャの望みに適った家賃だった。

###

（麻婆豆腐、おいしかったなぁ。また時間が空いたら来ようっと。イリアさんに紹介するのもありだよね）

東方料理は嫌いでなかったはずだ、とリーシャはアルカンシェルへ向かう道を上機嫌に歩いていた。もし、人がいなかったら鼻歌でも歌っていたかもしれない。

（アパートの管理人さんも優しそうな人だったし……。本当に良かった）

すでに引っ越しの手続きを終え、管理人との交渉も終わり部屋の鍵ももらった。

あとは生活に必要な家具を揃えるだけだ。

上手く事が運んだものだ、とリーシャは我ながら感心する。これが隠れ家作りだと天候の条件や地盤などが絡んで大抵順調に事が運ぶことはない。

住み処は住み処でも、隠れ家とアパートとではここまで進みが違うとは。

正直、1日で終わると思っていなかった。

歓楽街の広場に入ると、二人の男女が目に入った。物影に隠れ、誰かを見ている。

こっそり近づいて二人の視線の先を見る。

アルカンシェルの前にあるアイスの出店。水色の髪の女性が店からアイスを取り出し、客である金髪の女性と濃い紫の髪の女性に渡す。

「あそこの店はマークね。ねえ、イリア様は何を買ったの！？」

「いや、俺にも見えなかったって。おい、あまり揺らすんじゃねぇよ！」

騒ぐ二人を一瞥し、すぐに視線を客――イリアとプリエに戻す。

（まだ稽古の時間なんじゃあ……どうしたんだろう？）

リーシャはいまだに暴れている知らない二人を放置し、イリアとプリエの元に音もなく駆け寄った。

「イリアさん、プリエさん」

「あら、リーシャ。もう終わったの？」

アイスを食べながら尋ねるイリアにリーシャは頷いた。

「はい。いろいろあって迷ったんですけど、すごく安い物件があって……管理人さんも親切でしたし」

「うふ、良かったじゃない。お祝いに、リーシャもアイス食べない？　甘くておいしいわよ」

「それ、いいじゃない。よし、じゃあ奢ってあげるから選びなさい」

プリエの提案にイリアが名案だとばかりに手を叩く。リーシャは困ってしまった。

さきほど食べた麻婆豆腐がまだ胃の中に残っているうえに、まさかのイリアの奢り。

これ以上お世話になるわけには、と思う反面、ここで断っては逆に失礼なんじゃ、と考えがうずまく。

「えと、じゃあすいません。シャーベットのオレンジで」

結果、１番安くて量も少ない物を選んだ。

「よし、オレンジシャーベット一つね！」
「３００ミラになります～」
イリアは３００ミラを払い、オレンジシャーベットを受け取った。
プリエはあまりのおいしさにか、いつの間にか購入したバニラアイスを頬張っている。
「はい、じっくり味わいなさいよ」
「はい、ありがとうございますイリアさん」
オレンジシャーベットを受け取って、一緒についてきたスプーンの包装紙を破く。
オレンジの味が染み込んだ氷の粒の結晶にスプーンを突き刺す。ざす、と涼しげな音が響いた。
掬ったシャーベットを口の中に入れると、オレンジのさっぱりとした味が舌全体に広がる。
「そういえば、あんたどこの部屋借りたの？　やっぱり東通り？」
固体から液体へと戻ったシャーベットを喉の奥に流し込み、首を振った。
「いえ、旧市街のロータスハイツってところです。２階の１番奥の日当たりが良い部屋ですね」
良い部屋が借りられて本当に良かったです。お家賃も安いですし。
ざす、とシャーベットにスプーンを刺す音がやけに大きく聞こえた。
突如訪れた沈黙に、リーシャは恐る恐る顔を上げる。すると、イリアとプリエの驚いた顔がそこにはあった。
なんて珍しい。特にイリアの驚いた顔なんてもう一生見られないん

じゃないだろうか。

「ちょ、リーシャ。あんたなんでそんな治安が悪いところ選んだのよ！」

「うええ？　お、お家賃が安かったので」

「家賃が安いところは大体問題があるって言ったじゃない。先輩の言葉を忘れるなんて、もう揉むしかないわねっ！！」

空になったアイスの容器を投げ捨て、イリアは両手を怪しくうごめかしながらリーシャに接近した。

「人、人いますってイリアさん！」

襲い掛かってくるイリアの手を、胸を隠しながらリーシャは左右にひらひらと避けていく。

プリエは「元気ね～」なんて呟きながらアイス片手に観賞を決め込んだ。

（プリエさん、助けてくださいよ～）

異様な速度を誇るイリアの魔の手。銀としての仕事を行うとき以上の集中力で動きを見切り、リーシャは最小限の動きで避け続ける。

幸い、狙いは胸とわかっているので動きを予測することはたやすい。

ただ、イリアの放つ異様な覇気が背筋に悪寒を走らせた。

あの手に捕まったらどうなるか。

恐ろしくて想像できない。

「くっ、やるわねリーシャ。胸を掴むことにかけても右に出る者なんていないって自負してたけど……甘かったわ」

「それ以前に掴まないでくださいっ！」

「ん～、無理☆」
「お茶目に言ってもダメです！」
「もう、リーシャったら注文多いわね～。いいから、掴ませなさい！　そして揉ませなさい！」
「も、揉ませませんっ！」

攻防が続いて数分、ようやく二人は止まった。
息の乱れはなく、ただ精神的な疲労感が凄まじい。特にリーシャは。

「ふう、良い汗かいたわ」

それ、イリアさんだけです。

## 新居のこと　3（後書き）

新居編終了です。
次からは黒月を出そうと思います。
キャラ崩れしてたらごめんなさい。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1099y/

《銀》を継ぐ者

2011年12月11日23時01分発行